
IS インフィニット・ストラトス/セカンド・ライフ

よしおか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス/セカンド・ライフ

【Nコード】

N9368Y

【作者名】

よしおか

【あらすじ】

初連載です。転生ものが書きたくて書いた、後悔はしていません。いえ、ちょっとばかりしています。

この作品には転生キャラクターが多数出演しており、原作とは話の流れが異なっております。ご注意ください。 12/5 キーワードを追加しました。

はじめに

注意！！

この作品はインフィニット・ストラトスの二次創作であり、以下の要素が含まれます。「そんなの絶対おかしいよ！」という方はブラウザを閉じる事をお勧めいたしますが、それでも読んで下さると作者が小躍りして喜びます。

- ・弱チート持ちオリ主達のテンプレ転生もの。

- ・作者がファース党（ことライトノベルに関しては『最初に物語に登場したヒロイン』至上主義者であり、その上『幼馴染ヒロイン』大好き）。

- ・よって恐らくほぼ確定と言って良いレベルでのいっくん×篝ちゃん描写が多数。

- ・しかしワンサマーハーレムは三巻辺りまで健在。

- ・織斑姉弟が原作よりも仲が悪い。

- ・オリキャラ男子達（多数）はみんな転生者。

- ・堂々とISに乗る野郎共。

- ・原作のイベントを大袈裟に描写。さらに一部を大幅に改竄。

- ・しかも最初の方IS関係無し。

・ラノベネタ、アニメネタ多数。

・真耶先生がMAYA先生。

・最近の作者は『機甲戦記ドラグナー』『ギルティクラウン』が好きで好きで夜も眠れない。

・原作開始時点でIS学園のパワーバランスが以下の通り。

千冬>>>>楯無>>>真耶>>ラウラ>セシリア〓鈴>シャル〓
簪 一夏（今作では微妙に強化されています） 篤>のほほんさん達
一般女子>オリキャラ男子達

・IS学園に足りなかったのは男子寮と体育祭（or球技大会）だよ！

・物語は基本的に一夏視点、オリキャラ視点、三人称視点で進み、各巻ごとに『今回の主人公は一夏と。』という風に展開。尚、原作以前のエピソードは殆どオリキャラ視点。

以上の注意書きに何かしら引つ掛かりを覚える方は、あまり真剣に読まないことをお勧めします。これまで小説らしい小説を書いた事の無かった学生が書くものですので。

開始してしばらくはオリ主『三上^{みかみ}孝明^{たかあき}』の紹介のような話になります。IS原作のキャラクターと出会うのは中学三年です。

では、大丈夫な方はGO！

プロローグ 誕生 (前編) (前書き)

始まりました。プロローグ編は主人公の前世を少しばかり。それと、何故転生するに至ったのかを書きたいと思っています。

ブローグ 誕生（前編）

それなりに良い人生だったのかな、と。三上孝明^{みかみ たかあき}は自問し、自答した。

中学生までは苛められまくった。今考えると当時の自分勝手な性格が原因だった為、まあ自業自得だな、と諦めることができるが、それでも当時は辛かった。なにせ、この世の全てが自分に敵意を向けているようにすら感じられたのだ・・・碌に勉強もせず運動もせず、口先だけで世渡りしようと思っていた中学生に、一体誰が好意的な目を向けるというのか。当時に戻るのなら思いつきり説教かましてやりたい。SEKKYOUでも可。もうあの駄目すぎる子どもを少しでも矯正できるならなんでも良い。

高校に進学して運動部の先輩達に扱かれ、まあまともな人格に近付いたかな、と思う。ついでに、少しだけだが体力も付いた・・・運動部では結局、三年間補欠のままだったが。面倒くさがりだったので、それも悪くないかな、と思う自分がいたのもまた、事実だ。・・・余談だが、学生寮でよくつるむメンバーの夜食は大体自分が用意していたので、いつの間にか「お母さん」などという渾名が付いていた時はすこし泣きたくなった。別段料理が得意なわけでもないのに。そもそもやる様になったのは毎度毎度じゃんけんで負けていたからだ。

大学は、国立に落ちて近くの私立に通っていた。この頃はいい加減に、自分の力を過信することも無くなっていたので、まあ俺の頭じゃ無理だったか、と諦めることができたが、国立に比べて異様に高い授業料だけが親に申し訳なかった。

大学で、一人の女性と出会い、意気投合した。話しているうちに、中学生の時に自分を苛めていたグループの女子だったと気付いた時は驚いたものだが。

「三上って聞いてピンと来たんだけどね、昔と比べてかつこよくな

つてたから、どんな風になったのかなーって思っ

などと笑いながら言うのだから、彼女も人が悪い。かつこよくなつたと言われて思わず浮かれたが、おそらく面構えから中二病が抜けて幾分かまともになったからだろうなと思う。

やがて、孝明は町の小さな工場に就職し、大学で出会った彼女と結婚した。中学の知り合い達からは、まさかお前達が結婚するとは思わなかったと一様に驚かれたが、それでも皆、自分と彼女の新たな門出を祝ってくれた・・・本当に、何故彼らと中学のときから仲良くすることが出来なかったのだろうか、改めて自分が恥ずかしくなった瞬間でもあったが。

二人の子どもに恵まれた。上は男の子で、下は女の子。子ども達が愛おしく、仕事も遣り甲斐があり、日々が楽しかった。

そして、今。二人の子どもと、その家族に囲まれて、三上孝明の・・・私の人生は、終わろうとしている。

一昨年、肺に癌が見つかったといわれた時は、ああ、こんなもんかと思つた。延命治療もしたが、もともと体力に恵まれなかった身体では、二年が限界だった。

医師に頼んで、呼吸器を外してもらつた。息子は自分同様に禿げ上がってしまった頭と肩を震わせているのだろう。娘も涙を堪えているのだろう。けれど、随分と前に糖尿の合併症で失明した自分にはそれらは見えず、声と感覚からそれらを推し量るしか出来ないのだが。なにも事態を把握していない曾孫だけが能天気になきゃあ

と声を上げて笑っていたが、不思議とその声につられて自分も笑っていた。

「ま、私の人生はこんなものだよ」

「父さん・・・！」

「お父さん・・・」

「爺さん・・・」

「おじいちゃん・・・」

「どれ。孝幸、こっちにおいで」

「あう、じーじ？」

悲鳴を上げる両腕の筋肉に鞭打って、まだ幼い曾孫を抱き上げる。

「覚えておくといい。人生とはやり直しがきかない。だからこそ、面白いのだ」

ろくに言葉もわからぬ子どもに、何を言っているのだろうかとなと私は自嘲する。それでも、それだけが。私がこの子に、この場にいる私の家族に伝えたいただ一つの言葉だった。

やがて、長らく黒い世界しか映し出すことの無かった視界が、ゆっくりと色を変える。それらが完全に切り替わり、意識がなくなる寸前。私はその色が、白と呼ばれる色だったことを思い出していた。

三上孝明 享年86歳。死因・肺癌。

「お待ちしておりました、三上孝明。新たな人生を歩む者よ」

「・・・なんじゃと？」

どうやら、私の人生が完全に終わるには、もう少しばかり時間が
必要らしかった。

プロローグ 誕生（前編）（後書き）

主人公：三上 孝明

見た目：黒髪黒目、中肉中背、身長は168センチくらい。

お茶の類が好き（紅茶、緑茶問わず）。

孝明の設定は意識的に、作者自身を投影しています。もしも自分がISの世界に行ったら何するかなあ、といった具合に。

・・・こーゆーの好きな人なら、一度はやったことあるよね？ね？
チラッチラッ

プロローグ 誕生（中編）（前書き）

前回の投稿時のミス。プロローグは三話です！

あ、ちょ、石投げないでー！？

プロローグ 誕生（中編）

そこは、何の変哲も無い空間。空を見上げれば星と月があり、足元に視線を落とせば土に根ざした草が見える。かすかに聞こえてくるのは潮騒の音か。

目の前に立つのは、ただの少年……。だが、その髪は綺麗に白く染まっている。いや、“染まっている”という言い方は正しくないだろう。少年の髪は僅かな傷みも見受けられず、それが天然のものなのだとわかった。

その姿にはどこか、侵されざるべき荘厳な雰囲気があり、思わず私は生涯信じることの無かった神仏の類を連想したほどだった。

「お待ちしておりました、三上孝明。新たな人生を歩む者よ」

そんな威厳ある少年にいきなりそんな事を言われれば、間の抜けた返事しか思い浮かばないのは私だけでは無い筈だ。

「……なんじゃと？」

「その疑問詞には如何様な意味が込められているのか。推定できるのは三十五の疑問に対してのものですが、統計的に見て一番多いと言える疑問に対して答えましょう」

言うなり白髪の少年は私の手をとって歩き出す。杖も車椅子も無いのに自分が自然と歩けていることに気付いたのは、歩き始めて三分ほど経った頃だった。

「此処は夢と現の狭間の狭間。目に見えずして存在しない地。霊長類が“死後の世界”と呼ぶ場所です。加えて此処は始まりの地。魂の子宮。再び世に生まれる魂が、新たな生き様を夢見る場所です」

――再び世に生まれる？

真っ先に思い付いたのは、転生、という言葉だった。たしか、自分が若い頃に友人たちがそういつた話で盛り上がっていたのを覚えている。そういえば昔漫画で読んだことがあったな。結婚式直前に事故死した男が、恋人が飼っていたペンギンに乗り移って恋人を見守るという作品が・・・いや、あれの場合は憑依か？

・・・いや、ちょっと待て。言葉尻から事態を把握しようと思って考えてみたが、ここで小休止だ。

「まさかと思いますが、ここに居る者達がまた、転生すると言うのですか？」

「然り。霊長類の言葉で言えば『そのまさかです』」

・・・どうも死後の世界の番人たる少年は、なかなか茶目っ気のある人物のようだった。

「あなたの最期には、少なからず未練のようなものを感じた。それであなたは死を受け入れました。理由を聞いてもよろしいか？」

少年が、まっすぐに私を見据える。

けれど私の答えなど、最初から決まっていた。

「・・・老いて衰え、子と孫たちに囲まれて死んだのです。なんの未練がありませんか？」

そうだ。少なくとも、あの死に未練など無かったはずだ。

「否、死そのものではなく、あなたが感じた未練は死に至るまでの数年間のもの。『このままでは死ねない』、『こんな形での死は嫌

だ』という想いが、あなたをこの地へ引き寄せたのです」

「それは・・・」

そんなことを言われても、あの死に未練など無い。なにより私自身がそう思っている筈なのに。

答えることのできない私を置いて、少年は身を翻した。

「何故に自身がここへ招き寄せられたのか。思い出したのならばお声をかけてください。私はその願いを聞き届けて、あなたを再び送り出そう」

言いながら、しかしこちらを振り向くことなく、少年は歩いて行った。

「・・・ひとまず、ここはどこなのだ」

意識を切り替え、あたりを見回してみた。少年に連れられて歩いているうちに、いつの間にか私は砂浜を歩いていたようだ。砂浜には私以外にも数人の人影が見えた。服装はさほど珍しいものでもなく、ここがキャンプ場だと言われても私は信じるだろう。

ただし、なにかしら違和感があったが。

初めにそれに気づいたのは、目の前に立つ青年の腹部を見た瞬間だった。

「ひいつ!?!」

「わっ!?! な、なんスか!?!」

その姿を見て、私は年甲斐もなく息を吞んでしまった。青年が身に着けていたパーカーの腹部は、どす黒い染みが広がっていたのだ。

「き、君、それは!？」

「へ?・・・ああ、これ。生前のもですよ。俺の死因は刺殺だったんです」

なんでもなさそうに言う青年の言葉に、私はこの空間が死後の世界なのだということを思い出した。

「・・・あれ。おじーさん、もしかして来たばかりなのか」
「あ、ああ」

しどろもどろの私の答えに、青年はふーん、と頷いた。よくよく周りを見てみれば、右腕と左腕で肌の色が違う女性が歩いていたり、足を引きずる子供がいたり、皆表面上は無傷に見えて何かしらの傷の跡があった。

「うーん・・・おじーさん、死ぬ前に目に不自由とかあった？」

「む・・・ああ。何年か前に糖尿でな」

「なるほど。今おじーさんの目がどっちも真っ白になってたから、もしかして、と思ったんだけど」

なるほど、生前の傷跡が反映されるのは私も例に漏れなかったらしい。

「ところでおじーさんは何でここに？見た感じ、事故で死んだとかではないみたいだけど」

ふっと浮かんだ言葉は、青年の言葉によってかき消された。

「・・・正直言つてわからん。私は自分の人生に未練なんか無かった筈だが」

「ふうん、羨ましいな」

「羨ましい？・・・そういえば、君こそなぜこんなところに。まだ若いようだが・・・」

私の言葉に、青年は苦笑を浮かべる。

「言つたでしょ、刺し殺されたつて。それも結婚直前に恋人にね」
「・・・すまん、悪いことを聞いた」

気まずげにつぶやいた私に向かって、青年はさほど落ち込んでいないような声色で言つた。

「まあ、過ぎたことだしね。正直、もっかい人生やり直すのが怖かつたけど、いい加減覚悟決めたんだ。やってやろう、つてね」

「覚悟？」

「ああ。もう一回人生を楽しめるんなら、やらなきゃ損だ。だつたら、とことん楽しもうと思つて」

なるほど、そういう考え方もあるか。

「それに、新しい力を持つて生まれることが出来るんだ。今度はきつと、いい人生にしてみせる」

「新しい力？」

「あの子どもから聞いたでしょ。『願いを聞き届けて、再び世に送り出す』って。あれは、生前叶えることの出来なかった望みを一つ、叶えてくれるってことさ」

言つて、佑介は手をひらひらと振る。

「俺は生前、人から信用されることがなかったんだよ。たぶん、昔の恋人も何か俺を疑つてたんだと思う。だから、俺は今度は、人から信用される俺になりたい」

「そう、か・・・君にいい人生が訪れることを祈つておるよ」

青年はこれから、あの少年のところへ向かい、転生するのだと言う。短い会話を交わした私と青年は、そのまますれ違い・・・ふと私は氣になったことがあつて、青年を呼び止めた。

「のう、君の名を覚えてくれんか？ここで出来た初めての友人の名を覚えておきたいんじゃない」

私の言葉に、青年はきよんとすると、微笑んで言った。

「佑介。いいおかゆうすけ飯岡佑介だ」

「私は、三上孝明という。では、縁があつたらまた会おう、佑介」

手を振りながら、青年は・・・佑介は、去つて行つた。

この時出会った彼が、後に訪れる私の第二の人生においてまさか生涯の友人になるとは、この時の私は思ってもいなかった。

プロローグ 誕生（中編）（後書き）

早く本編が書きたい。けれど真面目に転生を扱うと決めたのでちゃんと理論じみた（厨二）理屈を用意しないと。
次回、ようやくと主人公が転生します。

プロローグ 誕生（後編）（前書き）

転生にかかわる云々は今回でラスト。次回から、ようやく主人公の第二の人生が始まります。

プロローグ 誕生（後編）

あれからどれくらいの時間が経ったのか。時間の概念すら危ういこの空間では、それを正確に推し量ることは出来ない。ただ海を眺め、新たな自分の身の振り方を熟考する。叶えられなかった願いとは何だったのか。身を助ける一芸を授かれるならば、何が欲しいのか。

「私の未練がなんだったのか、結局私はまだわかっていないんだな・
・・」

佑介を見送って、暫く経った。それから私は、この場にいた人々と話をした。彼ら彼女らはそれぞれが、自分がどういう死に方をしたかを語ってくれた。

それでも私は、未だに自分の願いが分からなかった。

「三上孝明。ここに居られましたか」

体言止めと敬語が混ざったちぐはぐな言葉遣いが聞こえてきて、ふと私は視線を上げる。やはり、そこには私をこの砂浜に連れてきた少年が立っていた。三角座りで海を眺めていた私の方に近づいてくると、少年は言った。

「この場にいた者たちは皆、己の願いを私に伝えて新たな人生へと進んだ。この場にいた死者はあなたで最後です」

そう。おおよそ数時間前だろうか。『今度は死ぬ前に大学へ進学したい』と言っていた女性が少年のもとへ向かったのを最後に、この砂浜から私以外の人影が消えた。

自分の未練が分からないのは、私だけになったのだ。

私は突然の彼の来訪に驚いたが、彼は私を見て淡々と語り始めた。

「これまで、あなたのように己の未練が分からぬ者がいなかった為に言う必要がありますでしたが、転生には刻限がある」

寝耳に水もいいところだった。

「で、ではその場合、私は」

「刻限を過ぎれば、あなたはただ彷徨う魂として、新たな生を歩むことも消えることすらもなくこの場に存在し続ける」

それは、私が完全に、ヒト以外のなにかになることを意味した。

「それが嫌ならば、早々に己の願いを見つけることです」

言いたいことを言い終えたのか、少年は砂浜から去って行った。

「・・・私の、願い」

消滅することもなく、ただ悠久の時をさまよい続ける迷い子。それは、どんな苦痛だろう。とうに人生を終えたからこそ、私はこの地に招かれたはずなのに。あるいはこれが、死の間際に見ている胡蝶の夢であって欲しいとすら思う。

「私は」

いつも見ていた海。覗き込めば、そこには勝手知ったる自分の顔。そして、白く濁り、光を映す事の無くなった両の瞳。

「そうか。私の願いはこれだったのか」

佑介との会話の中で胸に悶えた感覚は、これだったのだ。

「私の願いは――」

私は、少年の姿を探して、砂浜から離れた。森の中に入り、木の枝を掻き分け、時にその根に躓いた。

「はあっ、はあっ・・・」

息が上がる。老いたこの身に、森の中での散歩はちと厳しい。けれど、せつかく見つけた願い。見つけてしまえば、叶わぬままに諦めることは到底できなかった。

「今度こそ・・・今度こそ・・・！」

そうだ、“あの時”感じた悔しさを、何故忘れていたんだろう。確かに私は、自分の死に未練はなかった。

——けれど、私は。私が“彼女”の死を見送ることが出来なかったことを、悔やみ続けていた！

「決して損なわれない光が欲しい」

佑介も言っていたではないか。私の目は真っ白だ、と。

「この目で、世界を見続けていたい」

それが。それこそが、私の未練だった。

「私は！自分の目で自分の世界を見続けていたい！」

叫ぶように、言葉を発した時。

「合格です。おめでとう、三上孝明。あなたはここまでたどり着き、自分の願いを私に伝えた」

森の中の開けた場所で、私は少年と数分ぶりに会った。

「聞こえていたのなら話は早い。私は、死ぬまで失われぬ視力が欲しい」

少年がわざわざ警告に来たことからして、私に残された時間はさ

ほど多くはないだろう。転生の刻限があるのならば、私は急いでそれを成し遂げたかった。

「その言葉に二言はありませんね？今なら、願いなおせば来世での富や名声も約束されるのですよ？」

「いいえ、必要ありません。私の前世での未練はただ一つ、妻の死に顔を見ることが出来なかったことだ」

妻が逝ったのは、私よりも六年ばかり早かった。その時私は、既に失明していた。彼女が笑って逝ったのかさえも、見ることが出来なかった。

「私はもう、あんな思いをするのは御免です。私は視力が欲しい。それ以外のものは要りません」

私の言葉に、少年はしばし瞠目する。

「・・・解りました。それでは」

言って目を開き、私を見ると微笑んだ。

「具体的な数値の指定をお願いします」

思わず前のめりに転んだ私はきつと悪くない。

若干緩んだ空気に戸惑いながら、私は己の願いを急いで口にした。
時間がないのは変わらないのだから。

「え、えーそれではその・・・目は・・・視力は両目2.0でお願いします」

「色は？」

「はい？」

「灰色ですか」

「い、いえ黒で。生前と同じ色で」

私が言い切ると、少年の前に光の線が現れ・・・何事かと私が身構えるより早く、それは私を取り囲み、まばゆい光を発し始めた！

「な、これは!？」

「それが終われば、あなたは新しいあなたに生まれ変わります。あなたの新しい人生に幸あらんことを・・・」

少年はそこで、再び私に目を向けた。

「ただ、一つだけ言うことがあります。あなたが生まれ変わるのは、一つの物語の世界。あなたはその世界で、物語に巻き込まれ、苦しむでしょう。それでも忘れないでください。あなたはもう、以前のあなたではない」

なんだ、それは。どういう意味だ。

私が、その言葉の意味を問う暇もなく。

——私の意識は、一度途切れた。

プロローグ 誕生（後編）（後書き）

オリキャラ達に原作の知識はありません。こいつらは自分の考えやら前世のトラウマやらに従って原作の中で東奔西走します。

それによって原作が一部崩れたりしますが、はてさてどうなる事やら。主にプロットすら出来上がっていない夏休み以降のエピソードが（オイ）

わーいやっとシャルが書けるよう。

第一話：対策会議（しかし半分ぐらい徒労）（前書き）

こんばんは、よしおかです。書き溜めの内容を見返してみてもびっくり。驚くほどに内容が薄い！

・・・はやく・・・早く、原作が書きたいんです・・・

第一話：対策会議（しかし半分ぐらい徒労）

転生して数年が経った。

前世と同じく三上という家に生まれ、これまた前世と同じく孝明という名前を与えられた私は、今のところ大した怪我や病気をすることも無く、至って健康にすくすくと育っている。

前世との大きな違いと言えば、この年でここまで思考ができることか・・・とはいっても、初めからこんなことが出来たわけではないが。

初めにあったのは、何か、違和感のようなもの。言葉に出して会話をしたい、しかし言葉が出ない。何かを考えようとすれば、必ずどこかで思考に靄がかかる。そんなもどかしさが、常に頭の中にあつた。

その理由を思いついた時、私は愕然とした。

話は簡単。私の『意思』がしゃべろうとしている言葉が、私の脳に、『肉体』に蓄積されていないのである。

この理由に思い当たった後、私は必死に父の書斎にあった本を読み、それを音読することで意識と肉体との差を埋めようとした。成果は上々、私は思考と言語との差を、段々と感じなくなってきた。子どもの脳が恐ろしい勢いで身の回りの言葉を学習することが出来るというのは本当だったらしい。

もちろん、身の回りの大人や同年代の子ども達と会話する時は、必死に見た目にそぐわない話し方をしないよう意識して喋っているのだが・・・はつきり言つて、我が事ながら気持ち悪いのだ。「あのね、きょうね。。。ちゃんとおままごとしたんだよ！」と母に向かって喋る自分が。その母親すらも、前世の自分よりかなり若い。ちょうど一度死ぬ直前の孫たちがあの年頃だっただろうか。

まあ、要はあまり喋りたくない。

もう一つ、転生して驚いたことがある。それは・・・

「孝ちゃん、佑ちゃんが遊びに来たわよー」

「こんにちはー！」

若干舌つ足らずな声と共に、母親に連れられて我が家にやってきた少年。飯岡佑介が、私の隣の家に住んでいたことだった。

私が生まれた時、私自身の意識はあまり明確になっではいなかったものの、周囲の大人が何をしゃべっているのか、聞き取ることは出来た。

その中に、「あらあら、うちの佑介とお友達になるかしらねえ」という声が混じっていたのだ。

それから何ヶ月か経って、私の母は私を抱いて、お隣の家を訪ねた。そこに居たのが、私より二ヶ月ほど早く生まれた——私より二ヶ月早く生まれ変わった——飯岡家の長男、佑介だった。

・・・ついでに言ってしまうと、母親とはいえ二十代の女性と共にいるのが辛い佑介は、何故か母親よりも父親に抱かれていた方が泣かない赤ん坊として町内では有名になっていた。その度に彼の母が悔しそうな目で夫を睨み、睨まれた佑介の父は苦笑するという事態が度々起こっていた。

何故かと言えば、彼の前世での死因、恋人に刺されて死亡。が原因である。端的に言ってしまうえば、^{よわい}年齢数か月にして、佑介は女性恐

怖症を抱えていた。

閑話休題。

以来、私と佑介は出来る限り行動を共にし、二人で本を読み、知識の共有を図った。私の母も佑介の母も私達が仲良くなることが嬉しかったらしく、私達はよほど危ないことがない限り、二人で一緒にいるのならば親の目の無いところで遊んでいた。

その『遊び』の内容も、どちらかと言えば私たちの話し合いだったのだが。

今日も今日とて、三上家の客間で私と佑介は話し合っていた。この時間帯は父は書斎で仕事をしているし、私と佑介の母は趣味の料理のために台所に籠っていて、私たちが客間でこそそと話をしていたとしても聞き耳を立てる人間はいない。

「はああ、ようやく普通に喋れる・・・あー、共通語万歳。いろはにほへとちりぬるをー」

「まあお互い、あの喋り方は疲れる物があるからな」

ため息を一つ吐いて、私達はソファに腰かけた。私達の前には、母からもらってきたジュースの入ったコップと、幾らかのスナック菓子・・・そして、普段私がソファのクッションの中に嚴重に隠している、一冊の自由帳だった。

この自由帳は、何かの連絡の際に私と佑介が使っていたノートである。たとえば、今日のように私たちが会って話をするとき、話の内容を書き留めておくような使い方である。

「・・・で、じーさん。どうするんだよ」

「・・・どうって、何が」

ノートを広げてテーブルに頬杖をついた佑介は、私に切り出した。

「生まれ変わるときに言われただろ。今俺達が居るのは、何かしらの物語をモチーフとした世界・・・つまりは、何かの事件が起こる世界だ」

「・・・私もお前も、その“物語”に巻き込まれる、というあれか」

私達が今日、話し合おうと決めた内容がそれだった。

私と同じように、佑介もまた生まれ変わる際にあの白い少年に言われたのだ。今私たちが生きているこの世界が、物語の世界で、私たちはその物語の当事者の一人となる、と。

意識が明瞭になるに連れてその言葉の危険さを思い出した私達は、何とか最悪の事態を回避するべく、その物語の輪郭だけでも把握できないかと頭を捻り始めた。生まれ変わってそうそうにトラブルか何かでまた死亡など、冗談ではない。私達は今度こそ、納得のいく人生を歩みたいのだから。

自由帳の真っ白いページに、佑介はこれまでの話の内容をまとめていく。

「・・・にしてもお前さん、相変わらず汚い文字だな」

「ほつとけよ！？子供の握力じゃこれが精一杯なんだって！？」

がーっと吠える佑介。彼が生前とある工業大学で習った知識によると、人間の関節というのは成長に合わせて可動範囲が広がるもので、三歳から五歳の間にかけて手首の周りが大人と同じように動き始めるらしい。そういえば私もつい最近になって、利き手である右手の中指と薬指を別々に動かすことがようやく出来るようになって

きた。

「まったく・・・ま、ともかく。一体その“物語”が何なのかはまだ皆目見当が付かないけど、それでも何か対策を練ることが出来るはずだ。わざわざ巻き込まれるまで、手をこまねいて待ってるのは面白くないしな」

「ただ、問題はそこだろう。今から対策を練るとして、一体どういう方向性に？何をすれば、これから起こる“事件”に対応できるというんだ？」

「それは、ええつと・・・ほら、身体を鍛えたりとか」

出端から私の指摘で話の腰を折られた佑介は、しどろもどろに言葉を紡ぐ。

「・・・あのなあ、ここは日本だぞ？世界一安全な国なんて言われている。加えて私たちが今居るのは東北だ。関東の方ならともかく、こんなところに居れば事件に巻き込まれることなんて——」

この時、私の頭の中に思い浮かんだ事件とは、マフィアの抗争だとかそういった事だった。しかし、それが佑介には甘いと思えたらしい。

「ジーさん、見通しが幾らか甘いよ」

人差し指を立てて、佑介はそう言った。

「物語っていうのは、それこそ御伽噺だ。何が起きたって不思議じゃないさ。そもそも俺たちのこの『能力』^{ちから}だって、十分にありえないものでしょ」

そうだ。私と佑介が手にした力は、本来普通にもっているようなものではない。

生まれ変わるとき。私は視力を。佑介は人からの信頼を望んだ。結果、私は体が発達しきつていないにも関わらずに、一キロ先の信号の色を見分けられる目を。佑介は初対面の人物からも信用される、独特の雰囲気身を着けていた。

なるほど、佑介の言いたいことは分かった。私は、おとなしく彼の話を聞くことにした。

「じーさん、アニメとかは解る？」

「アニメ？・・・ああ、若い頃はよく見ていたが・・・」

アニメと言われて私が思い浮かべたのは古き良き宇宙戦艦の物語だった。三十年近く経ってから実写版が作られたらしいが、ちょうどその頃私は既に劇場に足を運ぶのも億劫な年齢になっており、残念ながら結局見ていない。

「ああいうアニメ作品に出てくるトラブルっていうのは、大抵が一般人には極力隠されるものなんだ」

「むう、そ、そうなのか」

「そうそう。余程の事が無い限りは悪人だって一般人に危害を加えたりなんかしない、とか」

「・・・一般人に危害を加えるから悪人って言うんじゃないのか？」

いやそれはそうなんだけどさあ、ああその辺りの矛盾が結構あるからあの作品二次創作盛んなのかなあ、となにやらぶつぶつ言いはじめた佑介だが、やがてその話題の事は脇に置いておくことにしたのか、頭をガシガシと掻きながら話を再開した。

「あー、たとえばだ。俺が前に好きだった“作品”の話で、魔法使い同士の戦いだとかそういう話があったんだけど。あれも舞台は日本の地方都市だった。しかも主要人物の年齢が軒並み一桁から十代前半。これだった場合は、マジで今のうちから対策練っておかないと冗談抜きで命に関わる。他にも、俺がよく遊んだロボットゲームの三作目は日本が舞台だったな。そっちの方はほとんどストーリー覚えてないけど」

駄目だ。魔法だのロボットだのと、佑介が言っている事の内容がさっぱり理解できない。大体にして、十代に行くか行かないかの年齢の子供たちが命がけで争うような物語だと？その世界の倫理はどうなっている。佑介の手元の文字を読む限りでは、り・・・りりなの？とか言うタイトルらしいが。

「色々と設定があつて、徹底した実力主義のせいで平均的な就業年齢が大幅に下がつてるとかそんな感じだったと思う。それに、映画にもなった人気の作品だったんだよ」

「・・・お前には悪いが、なんでそんな血生臭そうな作品が人気なのかさっぱりわからんよ。これが世代の差か」

「その言い方ですら俺の時には古かったよ。ジェネレーションギャップって言ってたから」

・・・むう。

「まあ、それはさておき。そういう作品に詳しいと対策も練りやすいんだけど・・・じーさん、そういうの全く詳しくないでしょ」
「ぬ・・・わ、私だってそうだった知識の一つや二つ・・・!」

どこか諦めたような佑介の視線が癪に障り、私は前世の知識から必死に、物語のストーリーを手繰り寄せる。本も読まないボケ老人だと思ふなよ。（佑介はそこまで思っていない）

「ああ、そうだ！水滸伝は原作も北方謙三版も読んだぞ！」

「ここ日本なんだけど」

「け、剣客商売！藤田さんが舞台に立ったアレ！」

「開国から百年経ってるんだけど」

「そ、そうだ！息子に薦められて『・NE PIECE』は読んだぞ！」

「・・・いや、たしかにアレ面白いけどさ。現代日本であの海賊漫画の知識？」

「・・・すまん、ワシ戦力外」

素直に負けを認める事にした。

ソファの上で佑介に背を向けて三角座りになった私を見かねて、佑介がフォローの言葉を紡いだ。

「ああでも、別の世界に引つ張られるっていう展開も可能性としてはありだな。充分検討しておいた方が良いか」

とりあえずここまでのおさらいーと、言いながら、佑介ががりがり自由帳に文字を書いていく。いつまでもいじけている訳にもいかなないので、私ものそのそとそちらに体を向けた。

「いずれにせよ初めに俺が言った通り、まず第一に身体を鍛えてお

く事かな」

言って、佑介が指差した自由帳には、一、二、と番号が振られた文字の並び。

「『魔法』や『ロボット』だったら少なくとも体力が必要になる。じーさんは目も良いし、弓矢だったり銃だったちの扱いにも慣れると良いかもしれない」

そこで、佑介の指が下に動く。二段目の文字はミミズののたくつたような文字で『異世界』と書いていた。

「次、『異世界』だった場合。この場合は、体力に加えて、酷い環境の中でも生き残れるサバイバル技術、あとは現地で味方を増やす為の社交性が必要。サバイバルはキャンプとか行けば自然と身に付くだろうし、社交性は俺の担当になるだろうな。一応“魅了”の力がある筈だから」

そして三段目。

「最後、『推理』だった場合。これが一番難しい。推理小説や推理漫画つてのは、清々しいほどに人が死ぬ。人が死ぬから事件になって、それを謎解くために名探偵が活躍するんだからな」

推理というと、娘が小学生のころに好きだった小さな名探偵の物語が私の中では一番イメージが強い。なるほど、あれは『もはや呪いのレベル』と言われるほどに死人が出ていた。

「……つまり、私達も誰かに殺される可能性があるという事か？」
「……まあ、その可能性も小さくは無いんだよね」

あまり知りたくなかったことを知った気がする。

「これの対策としては、普段から人の恨みを買わないように生活する事の一点しか無いね」

「・・・佑介、大丈夫か？確か前世のお前さんって・・・」

「あー！ー！ー！！聞こえない聞こえない俺は何も聞ーこーえーないー！！！！」

結婚式寸前に恋人に殺された過去を持つ男は、耳を両手で塞いで叫んだ。どうやら生まれ変わって五年経ってもトラウマは消えないらしい。

三上孝明、飯岡佑介、共に五歳の春。

この半年後。『インフィニット・ストラトス』と呼ばれるパウードスーツの登場に、私たちは揃って頭を抱える事になる。

「「見通しがとことん甘かった・・・！」」

第一話：対策会議（しかし半分ぐらい徒労）（後書き）

対策会議、徒労に終わるの巻。五歳児がこんなところそこそやってたら微笑ましい通り越して気色悪いですが、原作の十年前にISが登場したという設定上、この無駄話ができるのは五歳から六歳の一年間だけでした・・・

佑介の設定はそのうちにまとめたいと思います。

12 / 5 文章を一部修正しました。

第二話：時の流れ（前書き）

こんばんは、よしおかです。前回からいきなりキングダムゾン
して中学生。今回はあの人がちよっとだけ登場！はやく本編で活躍
させたいです。

第二話：時の流れ

（世界も、とことん変わったな）

十月某日、全国中学校総合体育大会、いわゆる中総体の剣道競技会場にて。壇上で選手宣誓の言葉を述べる他校の女子生徒の姿を眺めながら、私は心中で呟いた。

「宣誓！我々、選手一同は日頃の練習の成果を充分に発揮し・・・」

数年前まで、あの場に立つのは昨年の優勝校を率いる『男子の主将』が当たり前だった。それが今では、当たり前のように女子生徒の中から部長が選別されて、当たり前のようにその女生徒が宣誓の言葉を読み上げる。まして、『前回』の私が生まれ育った時代なら、男子は剣道・女子は薙刀という線引き・・・というか、暗黙の了解があった。

それが、今では男にできることが女にできない筈がない、と叫ぶ者が居るのが当たり前になった。

世界はゆつくりと、しかし着実に、女性が牽引する社会を作り始めていた。

七年前。インフィニット・ストラトスが発明された時、世間の反応はどこまでも冷ややかなものだった。けれどこの世界が明確なストーリーに沿って進むと知っていたからか、私と佑介には真っ先に、それがこれからの世界を大きく変える物だと分かったのだ。

結果、後に『白騎士事件』と呼ばれる、下手を打てば私も佑介も

死んでいたかもしれない大事件が起こった。世界中の弾道ミサイルが日本目掛けてすっ飛んできたのである。

日本政府が事態の把握に追われ、米国をはじめとする弾道ミサイル所有国はなぜ自国の兵器が使われたのかで大混乱。太平洋、日本海など海に面した土地に住んでいた人々は大パニックを起こし、死に物狂いで逃げ出した。事実、私の家でも父と母が私を連れて取る物も取り敢えず、近所の山の中に逃げ込んだぐらいなのだ。

そんな時に、『それ』は現れた。

突如、海上に出現した超小型の——当時、対空防衛の要であった戦闘機に比べれば、平均的なヒトのサイズなどそんなものである——“ナニカ”が、手にした剣で次々とミサイルを切り裂き、拳銃に光の粒子をまき散らしたかと思うとその中から荷電粒子砲なる出鱈目な武器を取り出し、迫りくるミサイルの群れを一掃。慌ててスクランブル発進した戦闘機パイロット達の見撃証言によると、それはどう見ても人の形をしていた、というのだ。

『・・・圧倒的過ぎるだろ、インフィニットなんたら。アメコミのヒーローじゃあるまいし』

とは、事件が収まってからワイドショー番組でその一部始終（ネットに流出した動画だかを、報道特集で取り上げていた）を見た佑介の言である。

これを契機に、世界中の軍隊から既存の機動戦力が姿を消し、代わりにISと呼ばれる、『女性にしか扱うことの出来ない兵器』が第一線で活躍するようになった・・・まさか、女尊男卑などというふざけた風潮が出来上るとは露ほども思っていなかったが。

それにしても、これですますわからなくなった。一体、あの欠陥兵器が繰り広げる物語に、男の身である私や佑介がどうやって関わるというのだろうか。

佑介はまだわかる。彼は『前回』、工業大学に籍を置く学生で、殺害されなければそのまま大手自動車メーカーに技術者として就職していたはずだった。機械いじりが大の得意で趣味が高じて進路を決めたようなものだったらしいのだ。

どんなに出鱈目な兵器であろうと、人の手で金属から作られた代物ならば修理や整備に関わる人員は必要だ。そして、操縦するならともかく、整備するだけなら男にだって出来る。

実際、佑介は中学一年生にして、ISの技術者を目指して勉強していた。今ではすっかり同級生たちの中ではIS博士扱いである。

「たっかーあきー。お疲れっ」

噂をすれば何とやら。開会式を終えて、一度控えの席へ戻った私を出迎えたのは、文字通り生まれた時から友人。剣道部に所属していない佑介がここに居る理由としては、順調に市の大会を勝ち進んで県大会に出場した私達を、全校の生徒が応援に来たからである。佑介は、小学校に上がったあたりから私を“じーさん”とは呼ばなくなった。私もまた、言葉に出して自身を呼ぶ一人称を『俺』と変えた。なにやら、体だけでなく気分まで若返ったような感じがしたが。

（いや、実際若返ったんだっとな）

「どした？孝明」

「なんでもない。ちよっと小学校の時のことを思い出した」

「ふーん・・・」

しみじみと私が回想していると、佑介が声をかけてきた。

「なあなあ、開会式終わったら、暫くは自由時間だろ？客席から見ただけど、お前めちゃくちや暇そうだったぞ」

「・・・まあ、一年生の補欠メンバーである私はこの後おそらく一日暇なのだろうが。」

「喉乾いたし、水飲みがてらちょっと外行ってこようぜ」

言って、佑介は私の肩に手を置き、多少強引に私を会場から連れ出した。

「・・・背後から私に向けられる“女子達の”視線から引き離すように。」

「すまん、助かった」

「あー、構わないって。ああいうのは俺も気分悪いし」

廊下から会場の外に出て、人通りの少ない通路の自販機でジュー

スを買った後、私は真つ先に佑介に感謝した。

別に今の世界が気に入らないなどとストレートに言うつもりは無い。けれど、男だらけの町工場で汗水垂らして働いて一家の大黒柱と讃えられた経験——たとえ違う世界のことでも、私とは異なる“私”の経験だったとしても——を持つ身としては、女性に引つ張られる今の世界にはどうにも違和感を覚えてしまうのだ。

だからだろうか。私は通っている中学校で、好意的な視線を向けられる事が少ない。

態度に出さないように気を遣ってはいたのだが、やはりどこかで素の私が出てしまったのだろう。周囲に比べて“女子に親切じゃない男子”である私は、少々孤立している。

「やつぱ、慣れない？」

「こればかりはな。如何せん、この時ばかりは『前』の記憶が邪魔だよ」

今の時代に適応しようとするなら、私の考え方は持ち続けられ続けられるほど、自分の首を絞めるようなものだ。けれど、こちらはその考え方を八十六まで抱えて生きていたのである。今から変えようとしても、意識し続けるのはどうにも上手くいかなかった。

現状、人付き合いの上手い佑介が私の味方でいてくれていることで大事には至っていないが、私としても少々居心地が悪い。高校に進学する際には是非とも男子校に進学したい。

十月になって肌寒くはなってきたが、晴れた空から差し込む日の光は眩しく、空気は暖かった。

それでも、さらに気分が寒々しくなることに事欠かないのが、今の時世で。

『——然るに、これまでの旧態依然とした政治を一新しなければならぬのです！衆議院では未だに男性議員ばかりが大きな顔をし、彼らは二言目には「女は家庭を守れ」「女は子育てに専念しろ」とばかり！このような時代錯誤も甚だしい——』

この市立武道館の近くで行われているらしい選挙演説。おそらく集まっているのは、女性の権利を向上させることを目的とした公約を掲げた候補者と、それに同調した女性たちなのだろう。

「言ってることは間違っちゃいないんだが、いちいち大げさなんだよなあ。あんな風に、男のすべてが無能みたいに言われたら、言われた方だって黙ってないだろうにさ」

「話で飯を食う人間なんぞそんなものだろう。『前』から俺は、政治家と宗教家は信用しないことにしとるよ」

私とて、『前回』の人生で自分より有能な女性などそれこそいくらでも見てきた。そして私は、能力や人格に男女の差など関係ないと思っていたのだ。どちらがより強いのか、どちらがより優秀かなど下らない。問題なのは、“誰が”優れているかだ。

それにしても、ISを作り出した天才科学者は一体何を考えて自らの発明品を世に出したのだろう。

女性の地位を向上させたかった？いや、だったらこんな“劇薬”を使うような真似はするまい。相対的に男性の地位は段々と下がりつつある。いくらなんでもやりすぎだろう。

自分の名を世に知らしめたかった？それもおかしい。確かにISの生みの親、篠ノ之束博士の名を知らない者は居ないと言って良いだろう。だがそれは、自らの発明品を活躍するだけ活躍させたら姿を消した、国際指名手配のマッドサイエンティストとしての悪名だ。名声を犠牲にしても、やりたいことがあった？それは、いったい何だ？平穏な生活を切り捨てても求める物だったのか？

（・・・やめよう。おそらく私には理解できん）

考えれば考えるほどに底なしの沼に嵌まる思考を切り捨てて、私は武道館の外壁に取り付けられた時計に目を向ける。時刻は九時の五分前を指していた。

「いかん。おい佑介、そろそろ一回戦が始まるぞ」

「あ、やべっ。戻らねえと先輩にどやされる」

運動部の基本は五分前行動。佑介の焦った声と共に、私達は急いで武道館の中に戻った。

この後、なんとか団体戦の一回戦が始まる前に会場に戻った私は、補欠のメンバーが座る畳の上に正座しながら、先輩たちの試合を見学していた。私達の学校の男子チームは二回戦で敗れ、午前中には自由の身になってしまった。ただ女子チームが順当に勝ち上がり三回戦まで進んだので、私達は部員全員でそれを応援することになった。

そして、私は目撃することになる。後に友人となる一人の剣道少女の、姉への怨嗟が込められたそれはもう恐ろしい剣閃を。

とある都市のはずれに位置する、市立武道館。その一角で、その試合は行われていた。

相對しているのは、それぞれが違ふ中学校に通う剣道部所属の二人の少女。そのうち片方は、腰まで届く長い髪が、防具の後ろから一つにまとめて後ろに流されていた。

腰に巻く垂たれに刺繍された少女の姓は、篠ノ之。彼女の名は篠ノ之しん。数十分前に、同じ武道館にいるある少年が思いを馳せていた。狂気の科学者の、血を分けた妹であった。

箒と対面に立つ少女は、先ほどから氣勢の声を張り上げる事の無い箒を訝しみ、攻めあぐねていた。

氣即刃。古来、剣道において剣は氣より出いでるものという教えがある。自らの心が向かい合う相手に勝とうと思つた瞬間に、竹刀が相手を打っている、というのだ。自然、一度試合場に立てば、竹刀を握る者は声を張り上げ、相手を倒そうと意思を空気に滲み出させる。

ところが、審判が開始を宣言してからの数十秒、箒は無言のまま、竹刀の剣先をゆらゆらと揺らすだけで、一向に少女に向かって打ち掛かって来ようとはしないのだ。

その上、隙もない。

少女は、所属する剣道部の中でも後輩を引つ張る二年生で、剣道の経験も多く積んできた。それ故に、一見やる気を感じられない筈の構えに一分の隙もない——少なくとも、自分の技量で“こじ開けられる”ほどの大きな隙は無い——ことを見て取っていた。

（・・・ああもうっ！）

年下の筈相手に時間ばかりが過ぎていく試合に焦り、少女は手元に力を籠め、俗に、『小さい面打ち』とも呼ばれる動作で以て、足を一步、前へ踏み出す！

「えやああああああっ！！」

この期に及んで、筈は避けることもなく少女をじつと見据えている。

（とつた！）

少女が確信し、あとは竹刀の手応えと審判の判定を待つばかり、と思った瞬間。

ぱしっ、と軽い音と共に、少女が持っていた竹刀は、腕ごと大きく弾かれた。

「あ———？」

あれ、と思わず漏れた言葉が、完全に音を伴う前に。

「———ああああああああっっ！！！！」

少女の歩みは、鋭い気迫を伴った筈の体当たりによって大きく逸

らされ、がら空きになった胴に片手で構えた竹刀が打ち込まれた。

「胴あり！」

審判の告げた結果が、全てを物語っていた。

「・・・なに、いまの」

呆然と呟いたのは、観客席で私の隣に座っていた佑介だった。

「単純に自分の竹刀で相手の竹刀を弾いて、体当たりで姿勢を崩して、隙の出来た胴を打っただけ、だが・・・」

「いや、早過ぎだろ。なにあの子、さっきまで全然攻撃する素振見せなかったのに、反撃するとき竹刀が見えなかったんだけど」

そう、あの髪の長い女子が繰り出したカウンターは、少なくとも佑介の目には見えていなかったらしい。私は視力のおかげで、そして何より前世と合わせて十数年以上になった剣道経験のおかげで何とか目で追うことが出来た。おそらく、あの場で審判を務めていた剣道家の方々も似たようなものだろう。

それ以外の者に見えたのは精々が、うちの先輩が前に踏み込んだ直後、いきなり歩く方向を変えたところまでだろう。見るのもやる

のも、中学生にできる範囲の事ではない。

「それと佑介。あの女子の名前をってみろ」

「あ？・・・篠ノ之・・・しのののっ!？」

どうやらあの少女は、“あの”篠ノ之博士の家族が親戚らしい。

「おそらく『物語』の関係者だよ。もしかしたら、後々顔を合わせることになるかもしれないぞ」

「うっわー・・・勘弁してほしいな」

佑介がげんなりと言うが、私も似たような心境だった。もしも彼女と対峙して勝てるかと問われたら、答えは間違いなくNOだ。

結局、焦りがピークに達した先輩が再び竹刀を打ち込まれ、我が校の女子チームが三回戦敗退という結果が出るまでは、さほど長い時間はかからなかった。

私達は果たして、第二の人生を謳歌することが出来るのか。その悩みに、不安要素が一つ追加された、中学一年の秋だった。

第二話：時の流れ（後書き）

相も変わらず文字量が少ないうえに話が薄い。作者は剣道の経験はゼロではありませんが、辞めてからもう五年経ってます。なのでこんなに胡散臭い描写に。

・・・素振りだけでももっかい始めようかなあ・・・

12/22 誤字を修正し、文章を追加しました。

第三話：これより、物語は動き出す（前書き）

今回のセカンド・ライフは

- ・初っ端から佑介がヒヤッハーしています。ご注意ください。
 - ・途中で原作設定の改竄や本作品オリジナルの捏造設定が出てきます。ご注意ください。
 - ・後半から超展開入ります。ご注意ください。
- の三本立てでお送りします・・・あれ？

第三話：これより、物語は動き出す

中学校生活三年間のイベントの中で何が最も楽しみかと言われるば、もちろん俺は修学旅行と答える。小学校の時も五年生で林間学校、六年生では隣の県への小旅行と遠出する機会があったが、東京まで足を伸ばすのは『今回の』人生でこれが初めてだった。

五月下旬。三年生になり、人生の岐路の一つ、高校受験まであと一年を切った俺達は、修学旅行で東京に来ていた。修学という単語がついている以上、東京で色んな企業や店舗を巡り、そこで見学した内容について後日学級でプレゼンをやらなきゃならないのだが、どういつもこいつも遊ぶ気まんまんである。

かくいう俺もその一人、旅行二日目の自主研修でとあるイベント会場を訪れた俺はノートと筆記用具片手に会場をあっちこっち見て回っていた。

「おおっ！？あつちで量子変換の仕組みの説明とかやってる！？やべえ絶対見ないと！」

「おい佑介ー！っ！待て、待ってくれ頼むからああああっ！」

「待ちなさい佑介えっ！迷子になったらどうすんのよー！っ！っ！っ！？」

。後ろから聞こえてくる同じ班のメンバーの悲鳴も何のその（待て）俺は半年前から楽しみにしていた『IS技術博覧会』の会場で、歓喜の雄叫びを上げ――

「待・ち・な・さ・い・っ・て言っ・てん・でし・ょーがこのスカタンがああっ！！」

「ぎゃああああああああっ！？」

追いついて来た女子の一人が背後から俺の首をがっちりホールド！歓喜の雄叫びは悲痛な叫びに変更された！どうしよう！？女子に密着されてるのに全然嬉しくねえ！！

俺の弱点、“女性恐怖症”を知らない奴はうちのクラスにはいない。それというのも、クラス替え早々、初めて会った同じ班のメンバーを相手に俺が悲鳴を上げたからである。それからはあれよあれよという間に情報がクラス内に知れ渡り、『佑介が何かしたら女子をけしかけるべし』という泣きたくなるような不文律が出来上がっていた。

「っはあ、はー、やっと捕まえた・・・みんなー、馬鹿確保したわよー」

「わ、悪かった！俺が悪かったからやめてよしてお願い離してええええええっ！？」

結局、うちの班長であるその女子は、他のみんなが追い付くまで俺をホールドし続けた。

「はー、ひでえ目にあった」

「こっちのセリフだ、馬鹿」

「いきなり会場で迷子とか勘弁してくれよ・・・」

まだ震えの納まらない体を両腕で抱いて顔を青ざめさせる俺に、同じ班の男子二人がやれやれ、といった具合に話しかけてくる。

「ここに来たいって言ったのは佑介なんだろ。ちったあ俺たちの事

リードしてくれよ」

全く以てその通りだった。

半年前、学校に掲示されていたポスターでこのイベント、『IS 技術博覧会』の情報を得た俺は、家に帰ってからすぐさま開催日程を調べ、連れて行ってくれと家族に頭を下げて頼み込んだ。技術者の道に進みたいと思っていた俺にとって、この博覧会は何に換えても体験したいイベントだったのだ。

ところがどっこい、それから数か月経ってもう一度調べなおしてみたら、なんとその開催期日のだ真ん中に、我が校の修学旅行の日があるではないか。学校の金で行けるのならばそれに越したことはないと思つた俺は担任に直談判し、この自主研修の選択ルートにIS 博覧会に行く班を作ってもらった。

それからさらに数か月。JRとゆりかもめを乗り継いで、やつて来ました東京ビッグサイト。各国のIS 開発企業のブースが軒を連ね、自社の製品のアピールやら何やらを展示しているのを見て、少しばかり俺の理性が吹っ飛んだ。

「・・・よつて、この様に機動性と防御の堅牢さを両立させた日本製の量産型IS『打鉄^{うちがね}』は各国でも高い評価を得ており、レスポンスよりもトルクを優先した設計の腕部は特に災害救助などで効果を発揮しています。実際の現場でも・・・」

今俺の目の前では、日本の最大手ISメーカー『防人重工組合^{サキモリ}』のプレゼンが行われていた。サキモリは自衛隊の要請を受けた日本の重工業企業や生物研究所の幾つかが、研究者や資金を出し合つて作られた会社で、事実上自衛隊専門のISメーカーである。

二年前にサキモリによって開発された第2世代型IS『打鉄』は、現在自衛隊が正式に採用しているタイプで、予備機も含めて二十五機が全国に配備されているそう。

ふむふむ、と頷きながらプレゼンの内容をメモする俺。中学卒業後の進路をもう見定めている身としては、それに活かせそうな知識は出来るだけ持っていたかった。

ここで、少しばかり説明しておこう。現在日本には、ISに携わる者達にとって聖地メッカとも呼ばれる『IS学園』がある。ISの登場によって結ばれた『アラスカ条約』に則った経営のもと国連が資金を提供し、東京の海に浮かぶ孤島を開発して作られた学校で、ISの操縦や整備・開発の技術を教える専門学校。

日本にあると言ったが、学園は永世中立機関を謳っており、学園の敷地は日本でありながら日本ではない土地と言われている。どの企業、どの国家にも所属しない、既存のルールから外れた、独自の規則がある学園なのだ。

・・・というのが、一般的なIS学園のイメージ。

実はIS学園には、二つの学科がある。一つは、ISの搭乗者を育成する『操縦技能学科』。通う生徒たちは100パーセント女子だけで、東京湾に浮かぶ島の校舎に各国のIS搭乗者を目指す女子が集う学校。おおよそ上記の内容で間違っていない筈。これが世

間一般の人たちが見ているIS学園の生徒たちと言って良いだろう。もう一つは、関東内陸に校舎が位置する『整備技術学科』。主にISの操縦でなく修理や開発を教える工業系のコースで、こちらは別に完全な女子校という訳ではない。ISに“乗る”のは女にしか出来ないが、ISを“作る”、“直す”のに性別は関係ない。実際、去年もIS学園の整備技術学科を受験して、見事合格した男子学生は50人近い。

俺は『前回』の人生で、自分の手で新しい機械を生み出すという夢を叶えることが出来なかった。だから今回の人生では技術に触りたい。それも、最新鋭の、最先端の技術に。

そう思った俺の志望校が、IS学園整備技術学科になるのは、とても自然な流れだった。

サキモリのブースを見終わった俺達は次なる目的地、本日のメイイベント『自衛隊によるIS航空ショー』の会場へ向かった。

俺が買ったチケットは最前列で、なんとまあ無駄な幸運だ、と我ながら思ったものだが。と言っても、IS競技用の遮断シールドを張った施設が無い為、観客席とショーが行われる敷地は最低でも十メートル近く離れているのだが。

最前列の席で親父から借りてきたハンディカムを構えること数分。

『会場へお越しの皆さん、大変長らくお待たせしました！只今より、自衛隊神奈川基地所属・第三航空機甲小隊によるデモンストレーションを開始します！！』

軽快なアナウンスと共に、青く塗装された五機の『打鉄』が、会場の中央から空へ向かって飛び出した！

わあっ、と会場が歓声に包まれる。間近で見るISの生映像にか、それともそれを纏う女性自衛官たちの姿にか、観客たちは大興奮だ・
・言っておくが、俺は前者である。萌えゝとかぶひひとか言わない。決して。同じ班の男子二人がレオタード同然のISスーツを身に着けた女性自衛官を見て顔を赤くしているけど気にしない方向で、あいどんとけあ。

とかなんとか言っているうちに、五機のISはそれぞれ上空でばらけたかと思うと、円を描くようにぐるぐると旋回し始める。五人の中ではリーダーなのだろうか、他の四機に遅れて旋回を開始した一機が、客席に向かって飛んできたかと思うとぐるぐると高速でターン。五回連続のスピンを決めて、空へと戻って行った。

拍手喝采の中、五機は地上すれすれを飛びつつ、観客席に手を振りながら会場の脇へと飛んでいった。

『第三小隊の皆さん、ありがとうございましたー！続きまして、大阪基地所属・第四洋上機動戦隊による・・・』

テンポの良いアナウンスの中、俺はISを見て、複雑な思いを感じていた。

精神年齢が肉体年齢プラス20程になっているとはいえ、俺だって男の子だ。小さい頃にISを初めてテレビの画面で見てから暫くは、ひよっとして俺もあれを身に着けることが出来るんじゃないかと、淡い期待を抱いた。それが俺が男である以上は絶対に動かすことが出来ないのだと知った時は、当然ショックも受けた。

けれど、考えてみればそれでよかったのかもしれない・・・ブドウに手の届かなかった狐が、あんなものは所詮酸っぱくて食べたものではなかったんだと嘯くようではあったけど。

正直言って、これを動かす事が出来れば俺は一気に『一般人』の枠組みを飛び越えた存在になるんだろう。けどそれは同時に、俺達の身に迫る“死”がとことんまでに大きくなることを示していた。

どれだけ安全だろうが、健全なスポーツだと言い張ろうが、ISは兵器だ。そして兵器は、人殺しの道具。

もしも、男性でこれを動かす人間が現れたとしよう。女尊男卑に傾きつつあるこの世界で繰り広げられる『物語』は、おそらくこのパワードスーツを身に纏って戦う女性達のお話なのだろう。そんな中でISを動かせる男性は即ち、現在の世界のパワーバランスを崩せる男性、ということになる。俺がその『物語』に出て来る悪党ならば、これを利用しない手は無い。

解剖されて、男性をISに適合させる為の実験台にされるだろうが。悪の組織みたいな連中に拉致されて、その『物語』の主人公達と敵対するだろうか。

(・・・やめだ、やめ。俺はあくまでいち技術者になりたいんだってーの)

詮無き思考を切り捨てて、俺は目の前で繰り広げられる飛行ショーに集中する事にした。第一、さっきも言ったが男性がこれを動かせるはずが無い。俺は前世で叶えることの出来なかった技術者の夢を、今度こそ実現するんだ。

と、その時。がしゃん、という駆動音と共に、一機のIS・・・フランス製第二世代量産型IS『ラファール・リヴァイヴ』が俺達の傍に降り立った。ショーを終えた大阪基地のISだろうか。

「つとと、あれ・・・おつかしーわねー」

ISを身に付けていた女性は、なにかしらの作業をしているようだったが、それでもISが一向に動き出す気配は無い。

「あらー、参ったなあ・・・三番機でシステムトラブルです。PICが動作していないようで、帰投できません・・・了解、現場で整備班と回収班を待ちます」

通信ウィンドウ——たぶんこのショーの実行委員会とかだろう——を開き、二、三、言葉のやり取りをした女性は、そのままISを“脱ぎ”、待機状態にした機体から飛び降りると、ふーっと大きく息を吐いた。

・・・よもや、こんなトラブルで『R・リヴァイヴ』が間近で見れるとは。アリーナ席万歳。

気が付くと俺は、観客席のフェンス——急ごしらえで、俺の腰までの高さしか無かった——から身を乗り出して、食い入るようにその細部を見つめていた。

すると、愛機に視線を向ける俺に気づいたのだろうか、さっきまでその『R・リヴァイヴ』を身に着けていた女性が、柔らかに微笑みながら俺に声をかけてきた。

「君、このリヴァイヴに興味があるのかな？」

「へっ!?!・・・あ、す、すいませんジロジロ見ちゃって」

バツ悪そうに頭を掻く俺に、女性は気にしてないわよ、と微笑むとISに寄りかかって何をするでもなく、この現状を打開してくれるスタッフの到着を待ち始める。動かない『R・リヴァイヴ』が気になった俺は、恐る恐るその女性に声をかけてみた。

「あの、どうしたんですか？」

「ああいえ、ちょっとね。システムトラブルかしら。PICが動かないのよ」

「PICって、パッシブ・イナーシャル・キャンセラーですよね? ISを浮かべたり加速減速したりするのに使う・・・」

淀みなく答えた俺に、女性はキョトンとした表情を浮かべると、興味深そうに俺を覗き込んできた・・・って！近い、近い！！女の人が！女性が！？しかもなんかISスーツってなんか一昔前のスク水っぽくてなんかこう余計にえもいわれぬ悪寒がうわあああああああつ！？

「君、もしかしてIS技術者志望なの？」

「ひ！？は、はい！一応・・・」

何とか落ち着きを取り戻した俺は女性の問いに答える。すると、俺の後ろにいた男子生徒たちが面白半分に囁し立ててきた。

「佑介、見せてもらったら？」

「お前確か、志望校はIS学園の整備学科だったよな」

無責任極まりないことを言う二人に、あのな、と俺は反論しようとしたが、なんと思わぬところからその言葉は現実のものになった。

「いいわよ、別に。なんならちよつと試しに座ってみても」

言いながら女性は、『R・リヴァイヴ』のコックピット・・・装着時に体に乗せる位置を、ぽんぽんと手で叩いて見せた。

「え、良いんですか！？」

「ええ、どうせ今は壊れてるし、何より君は男の子なんだから実際に動かせたりしないでしょ？」

それもそうだ。

「・・・じゃ、じゃあ折角なんで」
「どうぞどうぞ」

やべえ、冷静を装っているけど、すごく嬉しくてドキドキする。気分はまるで、友達の持つっている高級なおもちゃに触れる許可をもらった幼稚園児の気分だった・・・いや、『今回』の人生では俺も孝明^{じーさん}も玩具に興味なんか示さなかったから、あくまでそんな気分かな、っていう感じなんだけど。

内心の昂ぶりを抑えつつ、俺はフェンスを乗り越えて『R・リヴアイヴ』に近づいた。装甲の隙間に足を引っ掛けて、装着時に体を預ける場所にどっかりと座り込み・・・

『搭乗者を確認、これより再起動します』

そんなガイド文が目の前に見えて、思考が完全に固まった。

「・・・は？え、いや、ちよつ！？」

もしかして俺はとんでもないことをしてしまったのではないかという感覚が一瞬頭をよぎり・・・次に何かを考える暇もなく、ぎゅいん、と“金属”の駆動音が体の下から聞こえ——！！？

「な、うおおおおおつ！？」

パニックを起こして悲鳴を上げた俺の体が、がしゃんがしゃんと動き続ける金属に包みこまれていきなりぐん、と視界が持ち上げられてちよつと今の衝撃で胃の中の物がせり出しそうになるけど我ま、ん、を？

「・・・は？」

なんか、視線が高い。先程まで俺と同じ目線の高さだった女性の脳天が視界の下の方に見えたことから、俺の背が急激に伸びたのかと判断。とりあえず今の一瞬でどつさり嫌な汗が噴き出た頬を掻こうとして右手を動かし・・・

「ぐえ」

腕にくつついていたと思しき鉄塊が俺の頬に命中。突然の衝撃に目を白黒させ、よくよくそれを見てみるとなにやらメカメカしい掌がそこにあつた。

「・・・・・・・・」

俺が右手を動かそうと思う。すると、右腕を包んでいるこつつい

装甲が手首の辺りからキューーンと音を立てて動く。多分装甲の中では俺の生身の手首が関節の動く範囲内でぐるぐる動いているのだろう。機械の手首は、おおよそ俺が自分の手首を動かそうと考えた通りに動いた。驚いた事にスナップを効かせるなどという小技も出来る。

「・・・・・・・・」

続いて指をそれぞれ思い通りに動かしてみる。触ってみて初めて解ったが、あのごつつい筒の中には指の並びに添って五つ並んだ圧力センサーと思しきものがあるらしく、俺がそれを握りこむとその力加減をトレース、更に角度を拡大して拳の形が変わる。ぐー。ちよき。ぱー。おお、自由自在。

「・・・・・・・・」

そして、周りを見回してみる。まず、目を見開いて固まっている、今の俺の位置に本来居るべきISパイロットの女性。その後ろに、揃って口をあぐりと開けている学校の友達。見れば、周囲の視線は全て俺に集中している。いやん、そんなに視線で犯さんという・失礼。馬鹿なことを考えた。

いつまでも固まっけていても仕方ないので、俺はとりあえず、率直に思ったことを口にした。

「・・・・・・・・えっと、なんで？」

『こっちの台詞だあああああああああああああああああああああああああつつつ！?!?!?!?』

『ストライク。イツチーズ』的な世界かと思いきやまさかの『けん。ファー』展開だったと俺が気付いたのは、自分が身に纏っ

るのが本来女性にしか扱えない兵器だという事を思い出したおおよそ数十分後だった。

・・・一応、俺が女になっちゃうとか、そういう事態は発生しませんでした。超安心した。

この日。日本のどこかでお昼のよるめきドラマを臨時ニュースに中断させられた無職の男が酒を飲んでくだを巻き。出番を打ち切られたワイドショーのコメントーターがスタッフに文句を垂れ。テレビを見て騒ぐ後輩に叩き起こされたお昼寝中のお局OLが後輩イジメを考え——それらは全て、予想を超える驚愕によって打ち消される。

『緊急速報！都内で修学旅行中の男子中学生 インフィニット・ストラトスを起動させる！』

伸ばしたその手に触れたブドウは、果たして甘いか酸っぱいか。そして少年とその親友は、その果実の味を感じることの出来る『物語の中の自分』にいつ気付くのか。

今はまだ、誰にもわからない。
今はまだ、何もわからない。

第三話：これより、物語は動き出す（後書き）

はい、やらかしました原作ブレイク。一夏に先んじて『人類初の男性IS操縦者』になつてしまつた佑介の明日はどっちだ！？

ISの手首の操作つてどうやってるんでしょね。本作品では『マクロスF』に登場した『EXギア』に似たようなもんだろつかと位置付けてこんな描写にして、尚且つマクロス繋がりでデモンストレーション飛行を入れてみました。・・・はてさて読者の皆様の反応や如何に。

あと、飛行ショーで出てきた五機の青い打鉄は完っ全にブルーインパルスへのオマージュですw

「IS学園に男子生徒が居ない理由」

技術者も育成しているはずなのに100パーセント女子高つておかしくね？と思ひ捏造。

IS学園は一応どの国にも所属しない永世中立機関であり、決して男性と女性のどちらかに味方する組織でもないので、建前上は共学である。学科も「操縦学科」「整備技術学科」の二つに分かれており、一夏達が所属しているのは操縦学科。学園ではISの技術者も育成しており、そちらの方には男子生徒がわんさか居る。整備技術学科は外部から講師を頻繁に招いたり大きな工廠が必要だったりする為に内陸側に作られており、操縦学科はISの運用の為の敷地（最悪、暴走しても一般人に被害が出ないためのスペース）と、アスリート育成の環境が必要な為に東京湾の島を開発してそこに作られている。

言つてしまえば操縦学科はまるまる“危険物”として隔離されているのだが、『IS操縦者』偉い』という間違つた認識の為に操縦学科のある本校舎はIS操縦者の聖地として特別視され、間違つたエリート意識に繋がっている。

尚、操縦学科に所属する生徒のうち数名は整備技術学科を中学課程で卒業後、操縦学科に編入学している。

・・・大丈夫かな、こんなのやっちゃって。

12/26 本文中の説明文で日本に配備されている打鉄の数を減らしました。

第四話：皮算用と家族の絆。そして、全国一斉検査（前書き）

こんばんは。もしくは超お早うございます。

今回のセカンド・ライフは

・ちょっと孝明が壊れました。あなたきつと疲れているのよ・・・

・その頃の佑介。

・また超^{おまえ}展開か。

の三本でお送りいたします。

第四話：皮算用と家族の絆。そして、全国一斉検査

結論から言おう！佑介が一時的に政府預かりの身になった為に飯岡家は東京に引越しました！わあい何この急展開！

・・・はい、すみません。私かなり取り乱しておりました。ええもう大丈夫です、トランクライザーがありますので・・・え？最近の若い人はトランクライザーなんて知らない？そうなの？（現在は抗不安薬と呼ばれ、トランクライザーという呼称は一般的ではありません）

あの後、修学旅行は急遽中止され、私たちは三日目に行く予定だった某有名テーマパークに足を踏み入れる事無く生まれ育った東北の地へと戻ってきた・・・騒ぎを聞きつけてやってきた黒服の大人達に連れ去られた佑介を東京に残して。

連れ去られたと言っても、決して佑介の意思を無視して拉致したわけではない。宿泊先のホテルの一室で教員の立会いのもと様々な説明を受けた佑介は、国家公安委員会を名乗る黒服達に逆らうことなく彼らのもとへ向かったそうだ。あの男のことだから、身の安全を再三にわたって確認したうえで付いて行っただろう。公安の保護を受けるといふのなら、日本においてはこれ以上に安全な場所はない筈だ。

「『物語には否応なく巻き込まれる』・・・こういうことか」

自室の机に肘をついた私は大きく息を吐く。窓の外に視線を向ければ、灯りの消えた飯岡家が電灯の光を浴びて夜の闇の中にぼんやりと佇んでいた。

おそらく佑介は、『物語』の登場人物になった。これから彼は『物語』の登場人物と接触することになるのだらう。友人となるか、敵となるのかは分からないが。

だが、私一人が指をくわえてそれを見ている訳にもいかない。佑介がどう思っているかは知らんが、私にとって佑介はこの世界で最大の味方であり、文字通り私の『全て』を知っている大事な友人だ。叶うのならば助けてやりたい。

「その為には・・・」

机の上に視線を移せば、今日の午後、書店で買ってきた本の山。

『IS入門 初級者編』

『図解でわかる！ インフィニット・ストラトス』

『目指せモンド・グロツソ！ 元日本代表候補生に学ぶ、スーパー訓練法』

それらは全て、ISに初めて触れる人を対象にした入門書だった。
・入門と言っても、そこはそれ、やはり専門書。わずか三冊で五千円飛ぶとは思っていなかった。

佑介がISに携わる者としてこれから『物語』に入り込むのなら、それを助ける立場に立とうとする以上ISの知識は必要になる。

そして、淡い希望もあった。

——佑介が動かせたのなら、私にも動かせるのではないか？

それに気付いたのは、書店での店員との会話。初め、こういった“女性向け”の本（変な意味に非ず）を買うことに僅かばかりの抵抗があった私は、目的の本棚を見つけてそこに売っていた本をぱらぱらとめくって流し読みをするだけで、なかなかレジに持つていくことが出来なかった。

ところが、私の後からIS専門誌のコーナーに足を踏み入れた男性が、適当に二、三冊ほどそこにあった本を手にとったかと思うと迷うことなくレジに持つて行ったのだ。これには驚いた。

その後、私は流し読みしていた本を纏めて、レジに持つていく。どうしても気になって、レジスターを打っていた男性店員に聞いてみたのだ。

「あの、俺の前にISの本を買って行った人が居たみたいなんですけど」

「ん？ああ、さっきのお客様ですね」

やっぱり気になりますよね、と彼はつぶやくと、手早く私が買った本を紙袋に詰めながらこう言った。

「ここ数日、IS関連の本が飛ぶように売れてるんですよ。なんでも、もしかしたら自分もISが動かせるかもしれないって」

店員が言うには、史上初の男性IS操縦者・飯岡佑介のニュースが世間を騒がせてからこつち、『同じ人間の男に出来たのなら自分に出来ないはずがない』と、IS操縦者の入門書を手にして、『輝かしい未来』を夢見る者が後を絶たないのだそうだ。

言われて私ははっとした。まだ可能性の話だが、私もISが動かせる可能性がある。それも、私は明確に、おそらくは佑介と同じ理由で。

そうだ、佑介が動かすことが出来たのなら、彼と同じく“物語に巻き込まれることを予告された”私とて、同じことが出来るかもしれないのだ。

皮算用と言ってしまえばそれまでだが、知識を取り入れておくに越したことはない。

「・・・さて。取らぬ狸の、と言っが、果たして狸は出てきてくれるかな」

自室のベッドに寝転び、買ってきた本を開く。今日は遅くなりそうだ。

住み慣れた一軒家を手放して、俺と、俺の両親が目黒区のマンションで寝泊りするようになって、早一週間。朝起きたら見慣れない天井が見える生活はなかなか慣れず、ここ最近は母さんが体調を崩しがちだった。

要人保護プログラムだかなんだかで仕事をしなくても一定の収入を得られるようになった父さんが代わって家事をしているし、俺も手伝っているから我が家の台所は今のところ普段と変わらない。

「佑介、こつちの皿は出来上がりだからテーブルに出してくれ」

「はいよー・・・うげ、また大根の煮物かよ」

「煮物は良いぞ。油を使わず栄養満点、何より作るのが楽だ」

「俺が昔大根食って腹壊したの覚えててやってるだろ」

さあて知らんなあ、と笑う親父。殆ど監禁されているようなものののに、この人はめげない。初日に俺たちのここでの生活を説明しに来た公安の人達相手に『最低限の趣味や買い物だけはさせてもらう、私達一家は人間なのだから』という意見を押し通した胆力は伊達ではないらしい。冷や汗を掻いた公安の人を追いつ返してすぐ、不安に震える母さんを優しく宥め、俺を励ましてくれた親父は、強い人だった。

「それより、そろそろおじやが出来るから母さんのところに持って行ってくれるか」

「わあーった」

軽く返事をして、俺はコンロの火を止める。その上にあつた土鍋を鍋つかみと布巾で持ち上げると、鍋敷を敷いたお盆に載せる。箸とレンゲと小さいお玉、おじやを盛って食べる用の母さんの茶碗、最後に小皿に載せた梅干しをひとまとめにすると、廊下を通って母

さんのところへ・・・父さんと母さんの寝室へ向かった。

「母さん、メシ出来たから持ってきたよー」

ノックをして、中から返事。俺は片手で盆を持つと、ドアノブを捻って中に入った。母さんはベッドの上に体を横たえ、上体だけを起こして俺を迎えた。

生まれ変わってからしばらくは相手が女性と言っただけで近づくことが出来ず、近づけば形容しがたい悪寒に襲われて泣いたり悲鳴を上げたりしていた俺だが、一緒に暮らす家族には、この十四年でいい加減に慣れた。

相変わらず家族以外の女の人に触れたりすることは出来ない俺だが、母さんと会話するのにはなんの苦痛も無くなっていた。

「ありがとうね、佑介」

「良いつて・・・ほとんど俺のせいなんだから」

ぼそぼそと言って、俺は母さんの前におじやを盛った茶碗を差し出した。母さんは俺から茶碗を受け取るとレンジで掬って、ふう、と冷ましたあと、しっかりと食べた。

「ん、おいし」

「そりゃ良かった。父さんが張り切って作ってたから」

母さんの体調はだいぶ良くなっている。昨日は碌に飯も喉を通らなかつたようだが、今日は朝もちゃんと食べたし、昼食も食べれている。

「じゃ、食い終わったら回収にくるから、食べててね。俺も自分のメシ食って・・・」

「佑介」

自分の昼食を食べる為に居間へ戻ろうとした俺を、母さんが呼び止めた。何事だろうかと振り返ると、母さんは俺をベッドの近くに招き寄せた。

「母さんが身体を壊しちゃったのは、急に東京に来てびっくりしちゃったからよ。決して佑介のせいなんかじゃないわ」

「・・・それは」

「佑介がISを動かしちゃったのだって、偶然なんですよ？」

「・・・まあ、うん」

じゃあ気にしちゃ駄目よ、と母さんは微笑んで、俺に言った。

「それにね、お父さんもお母さんも、嬉しいのよ」

「嬉しい？」

「ええ、佑介と一緒に悩むことが出来て」

母さんは笑いながら、昔を懐かしむような表情を浮かべた。

「佑介ってば、夜泣きもしないしトイレもすぐに一人で行けるようになったし、本当に手のかからない子供だったのよ」

「う、そういう話は勘弁してくれよ・・・」

やばい、一番やめて欲しい話だ。生まれたばかりの頃、通常の赤ん坊と違ってある程度人格が形成されていた俺達だけど、如何せん脳の中に眠っていたそれが、体の幼さに耐えきれず常に寝ぼけている状態だったんだ。孝明が言うには脳の成長が俺たちの性格に追いつくまで時間がかかったということだったけど、早い話が俺達は、生まれたばかりで満足に歩くことが出来ず、食事も下の世話も人任

せにしていたころの記憶が、人よりも鮮明に残っていた。

俺の心中を知ってか知らずか、母さんはけらけらと笑って話を続けた。

「佑介が幼稚園に行くようになってからは、おかげで私もまた働くことが出来て楽しかった。けどね、やっぱり私達は自分が子供を育てているんだっていう実感が無かったのよ。あんまりにも佑介がお利口さんだったから」

言って、母さんは俺の頭を撫でた。

「だから、佑介が悩んで、私達を巻き込んでくれたのがとても嬉しいわ。私達は、佑介に家族として頼ってもらえる。こんなに嬉しいこと、滅多にないわよ」

そう言いながら俺を撫で続ける母さんは、本当に楽しそうでした。

俺は、前世の自分がどうのこうのと考え続けていた自分が、無性に馬鹿馬鹿しく思えた。

やがて、こんこん、とノックの音が聞こえた。両手がふさがっているから開けてくれー、という父さんの声に応じてドアを開けると右手に昼食の乗った盆を、左手に前の家で使っていたちゃぶ台を持って立つ父さんが居た。

「なにしてんの、父さん」

「考えてみたら風邪でもないのにわざわざ別の部屋で食べるのがアホらしくなつてな。折角だしみんなで食べよう」

父さんはなんでもなさそうに言うと、ちゃぶ台を寝室の中央に広げてその上に料理を並べ始めた。

それを見て、母さんはまた、くす、と笑った。

「ほら佑介、さっさと座ってとつとと食べる」

「佑介、お母さんにそっちの煮物も頂戴・・・あら」

そして、俺は。

「・・・こんなことで泣くな、ばかもん」

「つく、泣いて、ないし、えく・・・」

もう一度、生きる。それを聞かされた時は、ただ怖かった。いつかまた、望まぬ死が俺の身に降りかかるんじゃないかと。

けれど。生まれてきて良かった。この人たちに出会えて、この人たちの家族になれて良かった。

頬を伝う涙が暖かくて、俺はただ、嗚咽を押し殺していた。

それから二ヶ月後。全国の中学三年生の男子を対象に、ISの起動検査が行われることになる。発案は俺だった。

これから俺は、世界初の男性IS操縦者として政府の保護を受ける。それは、俺の身柄を狙って良からぬ事を考える連中が居る、という意味で。当然、矛先は俺の家族にも及ぶだろう。味方の確保と危険の分散。後から考えてみれば自分でも反吐が出るような打算でいて、俺は公安の人に言った。俺以外にISを動かせる男が居ない

か、検査してみたらどうですか、と。

自分の家族の平穏と、見知らぬ誰かの一家の平穏。二つを天秤にかけてから、俺は心の中で、見知らぬ人たちに詫びた。

（—— I S を使える男が俺一人なら、俺の家族は危険に晒される。けど、俺以外にも I S を使える男が現れれば、俺の家族への危険は少しでも減る。俺は、自分の家族のために“みんな”を巻き込む・・
・ごめん）

まだ見ぬ俺の“仲間”^{おせこ}へ、そして、おそらくこの検査に引つかかるであろう幼馴染の少年へ、俺はただただ、声に出さずに謝り続けた。

七月の半ば。例年であればもうすぐ夏休みだ、と浮かっていた時期であるにも関わらず、三年二組の空気はどこかピリピリとしていた。

それというのも、少し前に全校朝会で一つの通知がなされてからだ。

急遽、日本全国の男子中学生全員を対象に、ISを動かせるかどうかの検査を行うことになった。すでに前例のある我が校では、全国に先んじて検査を行う、と。

早い話が、男子生徒たちは皆、自分がヒーローになれるかもしれない、と思っていたのだ。

「な、なあ。今日の放課後だよな、ISの適性検査って」

「動かせちゃったらどうするよ？IS学園に入学することになるんだよな」

前の席で楽しそうに話す男子生徒二人。いわゆる“ちゅうにびょう”から抜け出し切れていない彼らにとっては、今日が人生の転機となる予定なのだろう。気持ちはわからなくてもないが。

彼らには悪いが、たぶん私は確実にISに適合する。佑介と同じく前世の記憶を持って生まれたから、という馬鹿馬鹿しい理由ではあるが、この際何でもいい。私が佑介と同じ位置に立てないといけないのだ。

と、件の男子二人が私の方を振り向き、興奮した様子で声をかけてくる。

「なあなあ孝明。やっぱお前も、IS動かせば良いよなって思う？」

「ああ。できればやってみたいな」

出来れば、では困るのだが。この二か月、自分なりにISを勉強してみた。本当は佑介が使っていたノートなどあれば良かったのだが、残念ながら引越しの際、彼の私物は徹底的に回収されていた。公安は、よほど佑介の個人情報情報を漏らすわけにはいかないらしい。独学では出来ることにも限界があつたが、やらないよりはマシだろう。

「だよなあ。なんてったってIS学園に入れば、女の子ばかりだし。きっと天国なんだろうなあ」

「ああ、佑介がうらやましいぜ」

・・・この危機感のなさは、若さゆえのものだろうか。それとも、彼らのおつむが少しばかり足りていないのか・・・

私は若干の呆れを声に乗せて、二人に言葉を返した。

「まあ、結果は見てみないと分からないんじゃないのか？」

「あ、くそっ、余裕かましやがって俺だっ——」

「浮かれるのはいいけど、動かしてから浮かれたら？」

突如、会話に入り込んできた女子の声に、俺たちの意識はそちらに移った。

「委員長じゃんか・・・おーおー、もう動かせるのが決まってる人は良いですねー」

「別に関係ないわよ、もうすぐ先生来るから静かにしてって言うてるの」

委員長、と呼ばれた女生徒は、男子生徒の嫌味な口調をもつとせず、にびしゃりと言いつつ。彼女は呼ばれたその名の通り、私達三

年二組のクラス委員を務めていた。又聞きで聞いた話だが、小学生のころからISの訓練を受けていて、受験の進路も既にIS学園を受験することで決定しているらしい。

「三上君、ずいぶん余裕みたいね。佑介君が動かしたんだから三上君もやりたがると思ったんだけど」

「出来れば動かしてみたいが、出来るかどうかがそもそも判らんかな。もう動かしたつもりで騒いでたら滑稽だろう。それに、ISは安全だなんて言ってるけど、俺にはそうは思えん。だったら、動かすなんて出来ない方が幸せだ」

私の言葉に、滑稽な騒ぎ方をしていた二人がバツ悪そうに明後日の方向を向いた。

「ふうん・・・まあ、ISが何なのか勘違いしている訳ではないみたいね」

委員長はそれだけ言うと、ISが何なのかを勘違いした者・・・ヒーローの武器同然に扱ってはしゃいでいた二人を睨む。う、と息を呑んだ二人に構うことなくそのまま自分の席に戻るべく踵を返し・・・その直後、言い忘れたとばかりに再び私の方を向いた。

「それはそうとあなた、相変わらずおじいちゃんみたいな話し方するのね」

「やかましいわ」

何がしたかったのか、委員長はその言葉だけを残して去って行った・・・ただ、すこし話し方に気を付けた方が良さだろうか、と思ったが。

放課後になって、私達は体育館に連れて行かれる。そこで私達を待っていたのは、武骨な鉄の塊。二ヶ月で付けた知識が間違っていないければ、それは日本製の量産型IS『打鉄』だった。

「では、一組の人から順番に・・・」

検査に立ち会う研究者だか自衛官だかの説明を聞き流しながら、私は自分の順番を待った。

一列になって並ぶ私達は順番に、待機状態のまま機器に繋がれた『打鉄』の前に連れて行かれ、用意された踏み台を使って『打鉄』の上に座らされる。端末から起動信号が送られてISが反応しなければ、そいつはISを動かすことは出来ない。

「・・・はい、もう良いですよ」

「え・・・あ、あのっ！もうちょっと・・・」

「はいはい、時間が押してるからごめんねー」

「あー・・・」

私の前では、適合検査で弾かれた一組の生徒たちがため息とともに、肩を落としながら歩いていく姿が見えた。

「な、なんか難しいみたいだな」

「っていうか、今のところ一人もないんじゃないか・・・」

休み時間に騒いでいた男子二人は、だんだんと自分の番が近づくに連れて落ち着きを失くしていった。

「はい、終わりです。残念だったわねー」

「えー、ちくしょう」

「動かせると思ったのになぁ・・・」

そして、その二人もむなしくとぼとぼ後ろの方に歩いていき・

「次、二十五番の三上 孝明くん」

「——はい」

私の番が来た。

「踏み台に上ってから、ここに座って」

「・・・・・・」

係員の指示に従って、『打鉄』の頂部に腰掛ける。ゆっくりと息を吐き、目を閉じる。途端に、何かが私の体を包み込み・・・

「——っ！？来ました！！」

「なにっ！？」

研究者達の怒鳴り声に、周囲のざわめき。

（・・・とりあえず、これから宜しくとでも言っておくべきか？インフィニット・ストラトス）

次に私が目を開いた時、私の視線は普段よりも高い位置にあった。自分の体を見下ろせば、戦国時代の鎧武者を髭髯とさせる、銀色の鎧。右手を目の前に持つてくると、そこにあったのは、尖った指

が特徴的な、攻撃的な機械の掌。

「適合例、出ました！三年二組 三上孝明！二人目のIS操縦者です！！」

「記録はあるか！？すぐに開発部に回せ！」

「ああーっ！？三上が本当に動かしやがったあああっ！！」

「良いなあ、孝明・・・」

一瞬にして喧騒に包まれた体育館の中。ひよつとして、高校でも委員長と同級生になるのだろうか、と思い当たった私はいえ。一通り起動中のデータを取られてから、その場にいた自衛官に声をかけられるまでの短い間、委員長と周りに呼ばれ続ける彼女のフルネームはなんだっただろうかと、阿呆なことを考え続けていた。

第四話：皮算用と家族の絆。そして、全国一斉検査（後書き）

ようやくとオリ主が二人とも物語に関わり始めました。ちょっと駆け足だったかと思いますが、これで日常編は一度終了です。最後にちらっと出てきた委員長は原作編で出すかどうかは不明です。んならアニメで出てきたキャラクターの名前を使ってしまうのか、それとも“IS学園の入試に落ちた女子”にしてみようか。さあどうしよう、ぐふふ。

「おまけ：没ネタ（冒頭のネタ）」

孝明「ええもう大丈夫です。トランクライザーがありますので・・・おい誰かー。ホットドガーの皆さん呼んできてー・・・ん？なんか電波が混線したな・・・（ぶつぶつ）」

孝明父「・・・息子よ。何があったのかは聞かないから、速やかに寝ろ。明日も学校だろう、ゆっくり休んで（頭の）疲れを取りなさい」

某PCゲームにトランクライザーっていうロボットが出てくると学校の先輩から聞いて。トランクライザー違いなので没。

次回。彼にとってのプロローグ。

次回、やっと原作キャラクターのエピソードです。またしても原作を無視した設定と描写がちらほら。いやー、石投げないでー。

12/17 文章を追加、修正しました。

第五話・彼にとってのプロローグ Side・I（前書き）

こんばんは。今回のセカンド・ライフは

・いつくんやつと登場

・だんくん（メインメンバーから）退場

・いたずらする方の黒ウサギが大変ないたずらをしようとしています。

でお送りします。

第五話：彼にとってのプロローグ Side・I

『・・・だから、これは彼女のためなんだ。この子の友達なら、わかつてあげてくれないか』

『そんなの嘘だ！そいつ嫌がつてんだろ！？離せよ！オレの友達を返せよおっ！！』

その光景を見て、一目で俺は理解した。
これは、夢だ。

小さい頃の夢を見たのだと思う。どこか遠くに行ってしまう、俺の大事な友達。少女の傍らに付き添う黒服の見知らぬ大人たちが、俺から少女を奪おうとしているように思えたんだ。それが嫌で、俺は抵抗した。剣を教えてくれた先生の教えも忘れて、背を向けた相手に木刀を振り下ろそうとして・・・それからの事は覚えていない。最後に姉さんの顔が見えたと思った次の瞬間、俺は意識を手放したから。

けれど、悔しいと思った。こんなのは嫌だと泣き喚いた。だから、剣を振り続けた。彼女をこの手で守れなかった事が。「お前に彼女を守る事はできない」という現実を叩き付けられたことが、酷く悲しく、苦しかったから。

もう、何も失いたくはなかったから。

八月上旬、東京のとある食堂にて。

「・・・ちか・・・一夏！」

「うおあつ!？」

聞き覚えのあり過ぎる声に名を呼ばれて、織斑一夏おりむらいちかの意識は深層から現実への回帰を果たした。飛び跳ねるように・・・というのは大げさだが、勢い良く持ち上げた視界が、光の信号を取り戻したばかりでの急な移動にぐらりと揺れる。いつもの一夏ならこの程度の動作はどうという事は無いが、寝不足の頭には大きな負荷だったようだ。

「おまえな、人んちの食堂で居眠りしてんじゃねーよ」

「あー、わり。最近どうも寝足りなくてな・・・」

中学からつるむようになった悪友に呆れたような声色で言われ、やや言い訳がましく言い返す。進学してからの二年半をほぼアルバイトと家事だけに費やしてきた一夏にとって、半年後に迫った高校受験は人生で初めて迎える難関なのである。生憎彼の家に塾に通うような余裕は無いので、彼は睡眠時間を削って自宅での勉強に励んでいたのだが、少々根を詰めすぎたようだった。

・・・まあ、進路に関して連日、彼の保護者である姉と取っ組み合

一寸前の口喧嘩をしていたのも原因の一つだったりするかもしれない。実際は取っ組み合いに発展する前に姉の拳で全てが終わる。ぼうりよくはんたい。

「千冬さん、結局なんだって？」

「『腕っ節以外に誇るものの無い能無しの分際で中卒で働くだど！？身の程を知れ馬鹿者が！』とか言われて拳骨一閃。就職したきや学歴つけろとさ、あの問答無用ジェノサイド女め」

結局僅かな抵抗も含めて、私立校でありながら学費が安く就職先の企業が選り取り見取りな家の近所の高校を第一志望とした。嫌っているわけではないがうまの合わない姉を頼らない為にも、目指すは学業特待生。おそらく一夏は、人生において今一番勉強しているのだろうと思っていた。

「・・・あのクールビューティーといいお前といい、相変わらずギスギスしてんな、お前ら姉弟」

友人・・・五反田弾ごたんだ だんが冷や汗を垂らしながら言った言葉に、けつ、と悪態一つ。

「ありゃクールじゃなくて冷徹っていうんだよ冷徹って。そんなんだからいい年こいて嫁の貰い手もないんだ」

「本人が居ないからって言いたい放題だな、お前。千冬さんの前でそれ一個でも言ってみろよ。英雄って呼んでやるから」

「君子危うきに近寄らずって言うじゃん」

人類最強を世界に認められた女に正面切って罵声を浴びせようと思う人間が果たしているだろうか。居るわけ無いなあ俺だったら延髄反射で逃げる、と何気にセコい事を考えながら、一夏はがりがり

と頭を掻く。

そんな一夏を見て、ふっと苦笑を漏らした弾はからかうように言
った。

「まあでも、腹の底から嫌い合ってる訳じゃないよな。お前の事見
てりゃわかるけど」

「・・・いやお前、俺の話聞いてたか？千冬姉がとつと結婚なり
なんなりして身い固めてくれりゃ俺だって好き放題出来るんだって
の」

「つまりは、千冬さんが幸せにならないうちは自分は幸せにならな
いって意味だろ」

「・・・うっせ」

顔を若干赤くして視線を逸らす一夏という珍しいものを見た弾は、
くくつと笑うと一夏の肩を組んでここぞとばかりにいじりにかかる。

「わかる、わかるぞ一夏よ！血を分けた『きょうだい』だものな！
晴れ姿は見たいよな！」

「だあーっ！肩組むな暑かしい！ってか違うつつつてんだろこの野
郎！？」

「照ーれーんーなって、俺とお前の仲だろ？それともなんだ、心配
してんのか。それこそ解るぜ、俺だって蘭が三つ指ついて『お兄様、
今までお世話になりました』なんて言うことになったら・・・ああ
っ・・・嗚呼っ！！」

「キモいわこの変態！？放せつての！」

「認めん！絶対に兄ちゃんは認めんぞ蘭！うちの妹に手え出す馬骨
野郎は例外なくブチコロス！！」

「うごががつ、は、放せコラ！？人の襟首抑えて一人でヒートアッ
プしてんじゃねええええええっ！！」

大衆食堂で大騒ぎする馬鹿な中学生二人。他に客が居ないからとはいえ、客の一夏はまだしも店員である弾は仕事もほっぽり出して馬鹿騒ぎに乗じているのだから、当然店主の怒りを買っわけ。そして、齢八十にして筋骨隆々の偉丈夫であるこの店の主、五反田巖^{げん}は孫だからといって、その友達だからといって甘い顔を見せる男ではない。

「うるっせえぞクソガキ共！ちったあ静かにしねえか！！」

「へぶっ！？」

「うぐお！！」

五反田食堂の（間違った）名物が一つ・冷やかし殺しの菜箸を後頭部に受けて、二人は顔面からテーブルに突っ伏した。

「い、生きてるか・・・弾・・・」

「・・・お、おう・・・なんか、きれいな花畑の向こうではあちゃんの手え振ってた・・・」

「随分と危なかったな！？」

着弾の瞬間から数秒間のブラックアウト（一夏：三秒　弾：八秒）を経てふらふらと起き上った二人は、実は人外のものでなかるうかという巖の怪力に戦々恐々しつつも、脱線する前の話に戻ろうと記憶を辿っていた。

・・・なんで人間が投擲した箸で気絶できるんだとかツツコンではいけない。誰に理由を問うたとしても「巖さんだから仕方ない」としか説明できないのだから。

「なんの話だったっけ・・・ああそうだ、俺の進路のことで千冬姉がぶんむくれてるってことだった・・・」

「進路っていえば・・・」

言って、弾は食堂の天井近く・・・壁の一部に据え付けられたテレビに目を移す。午後一時のニュースは、二週間ほど前から始まった男子中学生のIS適合試験の様子を示していた。

何でも最初に日本で発見された一人目に引き続き、これまでに日本で二人、外国でも二人と、合計五人の少年がISを動かしてみせたらしい。

「こいつらも大変だよなあ、受験どころじゃないんじゃないか？」
「だな・・・あ、でもこれ」

新たに画面の上に現れたテロップを読みながら、一夏はニュースの続きを聞いていた。

「五人はこれからIS学園に進学するため、短期間でISの訓練を・・・」

「IS学園に!？」

アナウンサーの声を弾の声に遮られ、一夏はとつさに身構えた。
「というか、それくらい驚いた。」

「おいおいおいIS学園って言ったらアレだろ!? 女の子の花園! 男子禁制禁断の地! この世の楽園! 男なら一度は入ってみたい場所っていうIS学園だぞ!？」

「違うだろ・・・ほら、聞きこえないからちよっと静かにしてくれ」

身構えるほどの理由でもなかった馬鹿馬鹿しい事態は即座に記憶から消し去るに限る。覚えているだけ時間と脳細胞の無駄遣いである。

ぐおおお俺も女の子に囲まれてウハウハしてえええ、と悶える悪友から目を逸らし、一夏はカウンターに置かれていたりモコンでテレビの音量を上げた。

『・・・の発表によりますと、五人はいずれも一般家庭の出身でISとの関連は今のところ明らかになっておらず、何らかの特異体質の可能性もあるということです。IS学園は今後、民間の医療機関にも協力を要請して五人が適合した理由の解明を・・・』

残念ながら五人の今後はよく聞こえなかったが、おそらくは彼らの進学先は東京湾の小島で決定したのだろう。

『只今入ってきた速報です・・・！？　ろ、六人目です！？　たった今アメリカ国防総省の発表がありました！　ロサンゼルス在住のアメリカ人学生がISを起動！　これで現在までに男性IS操縦者は合計六名になりました。繰り返します、アメリカ国防総省は・・・』

「・・・マジで？」
「・・・つつわぁ」

もしかして自分たちは凄い瞬間に居合わせてしまったのではないだろうか、と顔を見合わせる二人。

「しかし、ISねえ。あーあ、進路が確定した奴あ楽で良いよなー」
「そういえばお前、推薦だっけか」

「おかげで卒業までは大人しくしてなきゃいけないからなあ。成績落とせないから厨房にも立てねえや」

弾はやれやれ、と首を振り・・・そのまま何かを思い出したのか、
がたがたと肩を震わせ始めた。

察するに、いざ推薦を狙うと決めた際に巖に『家で料理してましたなんて理由で高校落ちたら三枚に下ろす』と脅されたのを思い出したのだろう・・・強く生きて欲しいと切に思う。

と、それまで震えていた弾が、ふと我に返って一夏に問う。

「そういえば、うちの学校では再来週にこの検査やるんだっけ・・・
なあ一夏。これ、もしも適性あったらどうする？」

「どう、って・・・」

問いに、一夏はしばし黙考し・・・

「欲しいな。俺は」

——だって、ISは嫌いだけど、ISがあれば『護れた』かもしれないから。

理由の大半を言葉に出さず、親友の問いには簡潔に答えた一夏。
言葉の意味をうまく誤解してくれたのだろう、弾はにやけながら、
だよなあ、と両の手を頭の後ろで組んだ。

「やつぱりお前も男だもんな。殆ど女子高だった学校に進学する男
が羨ましいか」

「そういうんじゃないって。それに、あくまで動かせたらの話だろ

？出来る出来ないがわからないからこんなバカ話できるんだよ」

その時、ちょうど厨房から巖に声をかけられた弾がカウンター越しに出来上がった五目焼きそばを受け取り、一夏のテーブルに置いた。

テーブルの上の皿が空になる頃には、彼らの話題は夏休み明けのテストの話にシフトしており、一夏曰く馬鹿話であるこの話題は、彼らはきれいに忘れ去っていた。

この二週間後。とある中学校で行われた起動適性検査において、打鉄を起動させて呆然とする長身の男子生徒に、既に検査で弾かれていた赤毛の男子生徒が「何でいつもお前ばかりか女に縁があるんだよ！？顔か！？顔なのかコラァ！？」と叫んで殴りかかる場面が見られるのだが、それはまた、別のお話。

「・・・あれー？おつかしいなあ」

誰も知らない、地球上のどこか。地図に記されていない建物の一つで、篠ノ之束は頬を掻きながら言葉を漏らした。

「私のISに勝手に反応した男が一人？なあにこれ、束さんは許可してないのにうちの子たちが男作ってきた。はっ！？もしやするとそのうち篤ちゃんもいつの間にかいつくんとくつついてたり！？いやーんお姉ちゃんはみとめませんよー！二人にはまだ早いっ！！」

きゃー、と全く緊迫感の無い悲鳴を上げつつもその手元——キーボードを叩く両の指は、全く動きを乱す事は無い。

「それにしても・・・うーん、いつくんはある程度予想がついたけど・・・なんなのこいつら？なんで私の作品達こともに勝手に触れて勝手に使ってるの？うつざいなあ」

先ほどとは対称に、全く表情を動かすことなくがたとキーボードを叩く束。世界中に認められた最高の頭脳と、世界中の大半に否定された価値観とを併せ持つ女性は、窓枠に積った埃を指でなぞるような感覚で、自らの思い描く世界に入り込んだ『異物』の情報を電子の海から無造作に引っこ抜いた。

「んーっと、この男子とこの男子とこの男子とー、あとこいつとこいつとこいつ！」

プライバシーの保護もなんのその。僅か二呼吸の間に、佑介をはじめとする六人の男性の全情報が、束の目に留まる。

「こいつは小さい時から爺くさい性格でー、こいつは軽い女性恐怖症ー、こいつはバカそのものでー、こいつは生まれてこの方風邪一つひいた事が無い、と。あとドイツ生まれのくせしてドイツ語よりも日本語が上手い奴とー、妙な幸運に恵まれた奴、か」

それは、本来彼らの通う学校の教諭以外に知りようの無いはずのもの。彼らの義務教育期間の中で記録された成績表、通信簿の類に記されているはずの、第三者の見た少年たちの像。

あまりにも簡単に引きずり出されたその情報を、別に学校が杜撰に管理していたわけではない。ただ、IT社会の流行に遅れまいと生徒達の日常を電子情報に記録したのが運の尽き。世界各国のミサイル基地に一斉にハッキングして、尚且つその痕跡を残さないようなこの天“災”博士に盗み出せないはずが無い。

始めは、自分の親友と妹と妹の幼馴染に妙なちよっかいをかけるつもりなら『消す』つもりだったのだが、なんと彼らはそれぞれ、大なり小なり“欠陥”を抱えているではないか。

「ふんふん成程へーほーふーん。うわ、キモっ」

続けて束が引き出したのは、世界中に仕掛けられた監視カメラやスパイ衛星をハッキングして得た、ここ数か月間の彼らの行動が映った映像データ。顔さえ解ってしまえば、それをもとに検索をかけることなど赤子の手を捻るようなものである。

ISという現在の地球上で最強の兵器を手にして浮かれるかと思いきや、彼らはそれぞれが不満げな顔をしている・・・約二名程、思いつき素で浮かれているが、しかもその二人のうち片方は年相応のはしゃぎ方をしているのだが、もう片方がテンション上がり過ぎてとても気持ち悪い。それでいて誰か他人の前に立つとしれっとしているつもりなのだから、かなり恰好が悪い。

どちらにせよ、彼らの細かい違いなど束には認識できないのでどうでも良い。

「うわ、何こいつら。私のIS動かしたのに何でこんなげんなりしてんの。チヨ―失礼。死ねば良いのに」

滅茶苦茶な言い分だが彼女にとってはそれが当たり前なのである。ただ、ここには居ない彼女の幼馴染である女性がその言葉を聞けば、束が“人の顔を見てげんなりしていると認識した”という事実に、目を見開いて驚いただろう。

しばし、六名のデータを見ていた彼女は、突然パン、と手を叩いて飛び上がった。

「・・・うん、決めたつ。こいつらにはいっくんと箒ちゃんといちゃんを引き立てる小道具になってもらおうつと！ヒーローの活躍に脇役は必要だね！」

そうだ。自分の妹が、自分の親友とその弟が繰り広げる“活劇”には、それを演出する為の駒が必要だ。ここは任せるといつてヒーローをピンチから逃がしたり、ヒーローの目の前で殺される事でヒーローに成長を促したり、ヒーローを裏切って敵になったり。

「ま、少しでも触れさせてあげるんだから相応の働きをしてもらわないとねー。うふ、うふふふ。うふふふふふふふふふふふふふふ」

狂気とも呼べる、何処までも曇りの無い真つ黒な思考。今日もまた、世界の大半を視界に入れることの出来ないアリスは一人、自らの世界の飾り付けに全力を傾ける。

うふふあははと不気味な嗤い声が響く秘密ラボの中、篠ノ之束は自らのシナリオを大幅に書き直していた。

より派手に、より面白く。手の加えられた舞台の上で誰が泣き、誰が笑うのか。

今はまだ、誰にもわからない。

第五話：彼にとってのプロローグ Side・I（後書き）

はい、オリキャラ達全員に死亡フラグが立ちました。

東さんを善玉にするか悪玉にするか迷っております・・・一応こんな占め方しましたが、善玉にする場合まだ修正可能な範囲・・・かな？

そして原作キャラが上手く書けねEEEEEEEEEEEE！！

この後のエピソード『訓練編』が終わったら、オリキャラ達のイラストを（下手なりに）描いてみたので後悔まちがった公開してみようかなあと思っていたり。

では、失礼します。

12/25 ルビの振り間違いを修正しました・・・ぜつつって
ー蔵さんは“いわお”さんだと思ってたのに・・・

第六話：合宿前日　ボーイズ・ミーツ・アット・スクール（前書き）

あけましておめでとございます。新年一発目のセカンド・ライフは

- ・野郎共の顔見せ
- ・訓練が始まるらしいです
- ・舞台は東京らしいです

の三本でお送りいたします。

第六話：合宿前日　ボーイズ・ミーツ・アット・スクール

九月二十九日。暑かった夏はとうに過ぎ去り、季節は秋一色。美しく染まる紅葉に思いを馳せる人がいれば、体重計との睨めっこの日々だと呻く人もいる。早朝のジョギングで健康を保とうとする人や、ついつい不健康な時間まで本や雑誌に目を走らせてしまう人も秋は、人それぞれに意味を持つ、多面性の時季である。

同時に秋は、厳しい冬への変化の季節でもある。変化するのは何も、季節だけではない。四月から数えて半年が過ぎ、人もまた変化を始める。就園、進学、就職。さまざまな人生の岐路に立つための準備が始まる時期だった。

そして、否応なく訪れる変化に対応するために、己を鍛えることになった少年たち。言うなれば『巻き込まれた』彼らは、ある者は嘆きながら、ある者は腹を括り、またある者は自ら望んで自らの“変化”を受け入れるべく、日々を過ごしていた。

その日、織斑一夏は朝から念入りに家の掃除に取り組んでいた。それというのも明後日から行われる“合宿”のせいで、暫く家を空けるからである。

これから来年の四月までの半年間、一夏は政府の要人の一人とし

て保護を受け、その身柄を国家によって拘束される。四月になってIS学園に進学してしまえば、一夏は日本に住みながら日本人ではない、IS学園の住人になる。それまでの辛抱と言ってしまうえば簡単だが、監視の下での生活を宣告されるというのはそうそう簡単に割り切れるものではない。

しかしその監視や保護を突っぱねることは、まして俺の事は放っておいてくれなどと叫ぶことは許されない。その身は既に一般人であることを認められない、世界で七人だけの男性IS操縦者なのだから。

常人ならばあまりのプレッシャーに心を毀してしまうかもしれない、そんな中。一夏は・・・

「ふん、ふふーん・・・つと。よおーしトイレ掃除完璧！あとは当日に水抜きしてガスの元栓止めて・・・あ、やべっ、そういや昨日作ったプリンの賞味期限が・・・」

・・・休日を潰し、鼻歌交じりにノリノリで家事に取り組んでいた。なんとという主夫の鑑^{かがみ}。お前は本当に思春期真っ盛りの男子中学生かと問いたいが、その前に何故その状況に疑問を感じていないのだとも言える。

・・・ツツコミは入れずに、そつと目元を拭うだけに留めておこうと思う。不憫すぎる。

男子IS操縦者向けの、短期集中特別養成カリキュラム。これまでにISに携わってきた者からすれば失笑ものでしかないその単語が一夏の耳に届いたのは、二週間ほど前の事だった。

インフィニット・ストラトスのイの字も知らずに過ごしてきた一夏がIS学園に進学するには、如何せん基礎知識が決定的に欠けて

いる。それは一夏に限らずISに適合した男子のほぼ全員に言えることだった。

ISの存在が世に知れ渡ってからと言うもの、小学生のうちから特別な訓練を受ける女子は日本でも多い。しかしそれはあくまで、女性がISに乗ることが出来るから。ISに乗ることが出来ない男性が、ISの英才教育を受けることなどこれまでは無かった。

しかしながらここに来て、ISを身に纏うことが出来る男性が現れた。彼らはこれからの一生で、否応無くISに関わることになるのだ。知識が無いなどという弱音を吐くことは、彼らの周囲が許さないだろう。

その為学園側は、来年度の強制入学の対象となる七人に手っ取り早くISの知識を付けさせ、ある程度の経験を積ませる為、一ヶ月間の訓練合宿を企画したのである。

「合宿かぁ・・・そういえば部活とか入らなかったから、剣道部の合宿は結局行かなかったんだよね」

訓練合宿の開催地である学園から一番家が近い為に前日から移動する必要もない一夏は、休日がちょうどよくぶつかったこともあってか、時間を持て余してしまっていた。

部活動にも入っておらず、受験の心配も無くなってしまった男子中学生。しかも立場が立場なので、ゲームセンターや映画館に遊びに行くことも出来ないと来た。

自然と一夏の手にはバケツと雑巾が握られ、ここ二週間ほど掃除の手を入れて居なかったトイレへ、次いで、散らかり放題の姉の部屋へと足が向かっていた。いくら緊張感が欠けていることは一夏も自覚していたが、変に気負うよりは余程良いと自分に言い聞かせて普段の通りに掃除をしていたのである。

そうこうしているうちに、家主が帰宅する。散らかり放題の部屋の持ち主である姉だった。仕事が忙しいだかで休日もろくに返ってこない不良姉だが、今日は帰ってくる事が出来たらしい。時計を見れば、もうすぐ昼飯時か。

「帰ったぞ」

「お帰りー。掃除してて手え離せないから台所のもの適当に食ってくれ」

玄関から聞こえてきた声に振り向くことなく返事を返し、一夏は掃除を続行する。

「おい、一週間ぶりに帰った家主に美味しい物を手ずから食わせてやるうという心配りはないのか」

あまり家事が得意でない姉・・・織斑千冬が自分の部屋を覗き込み、窓ガラスのレールに溜まった埃を掻き取る一夏に白い目を向けるが・・・

「・・・誰の部屋の掃除で時間取られたと思ってやがる？」

「・・・・・・・・」

一週間前とは比べようもないほど整頓されている自分の部屋と、それを成し遂げたのであろう弟の絶対零度の視線に押され、大人しく台所へ向かった。その背中がちよっぴり丸くなっているのはご愛嬌。

織斑千冬。インフィニット・ストラトスを開発した篠ノ之束博士と並んで、ISに携わる者ならばその名を知らぬ者は居ない人間の一人。元日本代表にして、モンド・グロツソ世界大会初代チャンピオン。『戦乙女』^{ブリュンヒルデ}の名を欲しいがままにする、名実共に世界最強のIS操縦者である。

そんな姉が居たからか、一夏がISに適合した時、他の三人の日本人に比べて周囲の反応はえらく淡泊だった。姉があれならば弟が使えてもおかしくはない、といった具合に。二年前から少しずつ良い方向に変わってきているが、もともと姉弟仲のあまりよろしくなかった一夏にとっては、その評価は実に面白くなかった。

しかし、それは弟個人を見て評価してもらいたい千冬にとっても同じこと。この数ヶ月、良くできた弟さんをお持ちで、と言って彼女の機嫌を持ち上げることに成功した輩はその殆どが、続けて流石はブリュンヒルデの弟と言ってそれまでの努力を無に還している。

（・・・さて、周囲が段々と騒がしくなってきたか）

冷蔵庫から出した牛乳を、コップに注がずラッパ飲みしながら、千冬は胸中で一人ごちる。

もともと彼女は、どうにかして一夏を『IS学園、並びにそれに準ずる機関に所属させる』つもりでは居た。大学を出てから教員としてでも、高校を出てから用務員としてでも。それが早まっただけで、さして問題はないのだ。

（一夏がISを動かすことの出来る男だ、という条件が無ければ）

千冬とて聖人君子では無いし、最強と謳われる自分の細い腕で何をどこまで“護れる”のか、見誤っているつもりはない。正直に言えば、千冬は一夏と、ついでに自分の平穩の為なら何でもするつもりだ。何かあれば、たとえ自分の幼馴染である女性やその妹だったとしても、千冬は躊躇いなく切り捨てるだろう。“その為”に、やりたくも無かった日本代表を引き受けて、モンド・グロッソで結果を残した・・・もっとも、この結果が後に足枷の一つになったのは、計算外であつたが。

（私に出来ることは。私がしなければいけない事は・・・一夏を守ること。そうだ。二年前のようなミスは、もう許されない）

それは、一つの約束。と言っても、それを交わした相手はとうに無く。そもそもその約束とて、千冬が一方的にもう居ない人間に誓っただけのこと。それでも千冬は、その一方的な誓いを反故にするつもりは無かつた。

空になつた牛乳パックを流し台の隅に置き、ふうつとため息。しかしその吐息に憂鬱なニュアンスはすこしも含まれておらず。弟を守ると誓った姉の、改めての決意が込められていた。

（そういえば、強制入学の対象には筈も居たが・・・すこし黙っておくか。そちらの方が面白——）

ふと、千冬の視界に入つたごみ箱。その隣にあつた分厚い書物には見覚えがあつた。

上に積まれていた新聞紙をどけて表紙を見てみると、そこには『千冬の職場』に関連のある単語が並んでいた。

ひくり、と千冬が頬を引き攣らせる。と、ちょうど一夏がゴミ袋を纏めて台所に戻ってきた。千冬はISの参考書を片手に、一夏に声をかけた。

「・・・一夏。これは明日から必要なものではなかったのか？」
「へ？・・・あ、いっけね。古い電話帳かと思って捨てちまつ、」

世界最強の拳が唸りを上げ、吸い込まれるかの如く一夏の頭頂部に突き刺さった。

ドイツの首都ベルリンの近郊に位置する、ヴィリー・ブランド国際空港。1934年の開港から旧ソ連軍による占領を経て、つい数年前までシェーネフェルト国際空港と呼ばれていたそこは、2012年に終了した拡張工事の際に名称を改め、かつての西ドイツ首相

と同じ名を冠していた。

休みが明けて、新年度が始まったばかりの今の時期・・・といっても、ここ数年は急速に日本文化が浸透し、今はヨーロッパでも四月に入学式を行う学校も少なく無いが、それはIS学園への進学による来日を視野に入れた女子校の話。共学校や男子校では未だに九月から新年度の学校が多い。

その為、ヴィリー・ブラント空港の三番ロビーで飛行機を待つ二人の男子学生も、本来ならば今日は自分の家からそれぞれ学校に向かっていた筈だった。

・・・二人が、ISを動かすことが無ければ。

「飛行機かなり遅れてるみたいだなあ。最近風が強いだけで欠航も多いらしいし」

「・・・そうだね。僕としては永久に欠航して欲しいんだけど」

黒髪の隙間から翡翠色の瞳を覗かせる長身の少年、ジルベルト・アクスと、俯いた顔を流麗な金髪に隠し、盛大に肩を落として溜息を吐く少年、ハインツ・グリュ・ネヴァルト。二人はここ数か月間、全世界のニュース番組で連日連夜取り上げられることになった、世界で七人しか見付からない男性IS操縦者であった。

二ヶ月ほど前に世界三人目としてジルベルトが、次いで、四人目としてハインツが。それぞれの通う学校で行われた検査で、見事『ラファール・リヴァイブ』を動かして見せた二人は、そのままベルリンまで連行されてあらゆる説明を受けた後に提示された書類に署名してめでたくドイツ軍人の仲間入りを果たしたのである。

ちなみに、その署名自体は決して強制ではなかったし、本来は二人とも乗り気ではなかった。“ある理由”から危険に関わることをひどく嫌うハインツなど特に、絶対に嫌だと喚き立てていたのだが、
・
・

どのみちISを動かせると分かった以上、どこから犯罪組織が接触してくるかわからない、と説明役の女性軍人に諭されて二人はひとまず落ち着き・・・通常の男性軍人よりも高い給金を出すと言われて、所謂“労働者階級”出身のジルベルトの心が大きく揺れた。加えてその女性軍人は、同年代の男子の中では“何故か飛び抜けて耳が良い”ジルベルトに目を付けた。ジルベルトの耳の良さをISの制御や情報処理に活かせば、女尊男卑の風潮が広まった軍の中でも、情報士官として高みに上ることが出来る、と。

乗せられた、と言ってしまえばそれまでだが、今までこなししていたアルバイトよりも効率よく生活費を稼ぐことが出来ると言われて、失業した父と、母のお腹の中にいる二人目の妹のことを考えたジルベルトはその場で署名した。

そして、頼みの綱であつた同じ立場の男子が首を縦に振ってしまつたことで、断るに断れなくなつた気弱な少年、ハインツ。ジルベルトと違い裕福な家の出身である彼は軍に身を置いてまでISに乗る必要性など無かつたが、幼い頃から父のもとで経営戦略を学び、また自身のある“経験”から危機回避に優れるハインツには女性軍人の言う通り軍籍を持つた方が安全だと理解してしまつていた。結局、一人引き込むことに成功して機嫌を好くした女性軍人の、期待が込められた視線に押し負けた彼は、ぎこちない動作で親から貰つた名前を羊皮紙に書き込んだ・・・わずか一枚の誓約書に、このご時世に羊皮紙を使う辺りドイツ軍の意気込みが見て取れたのも、原因の一つかもしれない。

そして、二か月間に基礎的な軍人の立ち居振る舞いやら日本語やら、簡単な護身術やらを叩き込まれた二人は明後日から行われるIS学園での特別カリキュラムに参加するため、空港に訪れていた。

「・・・つとにさあ。あそこでジルが断ってくれば僕だって・・・」

二ヶ月前までは住んでいる町も通う学校も違い、接点など無かった二人だが、共に簡易訓練を受けるようになってからは気安く呼び合える仲になっていた。ジル、というのは、ジルベルトの愛称である。

「う、悪かったってば・・・けど俺の家、生活がキツくてな。金が入るんだったら出来ることはやりたいって思ったのも事実なんだよ」

そう言つて苦笑を浮かべるジルベルトが着ているコートは袖の辺りがほつれて修繕の跡が目立ち、なるほど、数年は着回しているものらしい。裕福な家に生まれた自分には彼の心を理解して文句を言うことは出来まいと、ハインツはジルベルトを責めるのを止めた。どのみち、最終的に受諾してしまったのは自分なのだから。

「日本語だなんて言うんだっけ・・・インガオーホー？父さんにも昔から『お前はいつも何かに怯えている』って言われてさあ・・・僕だって色々考えてるんだよ？どうすれば危険から身を守れるのか、同じ学校のお嬢様に目を付けられないかとか・・・」

いかん、矛先が逸れたのは良いけどハインツが『無限に負のオーラ吐き出し機』になっちまった。胸中で呟くジルベルトは話題の転換を図る。

「そ、そういえば。着替えとかの他にある程度私物持つて行って良いつて言われたけど、ハインツは何か持つて来たか？」

「ん・・・一応、飛行機の中で読む本と、日本語の単語帳・・・そういうジルは？」

逆に問いかけるハインツに、ジルベルトはじゃじゃん、と習ったばかりの日本語で言って、ポケットの中に入れていた物体を取り出した。彼の手に握られていたのは、つい数週間前に全世界で売り出したオーディオウォークマンであった。

「こないだ出た給料で買ったんだー。日本製の最先端！！」
「お、そういやこれ雑誌で見たよ。本当に小さいや」

これまで雑誌で見るだけだったそれは、記事にあった売り文句の通り世界で一番小さいらしい。ただ小さいだけでは操作がしづらいのではないかと思うが、なんとこのウォークマン、ISの技術であった空間投影スクリーンの技術が用いられており、画面付きのメディアプレイヤーとしては世界最小であるにも関わらず、大画面でのテレビ番組視聴も可能な優れものであった。

このウォークマンに限らず、ISの発展は世界各国で技術の進歩を促した。レールガンの技術はリアモーターカーに。PICの技術は老人介護の場に。ハイパーセンサーはより正確な航行システムとして、海を行き交う船のブリッジに。

ISコア無しに既存の建物や乗り物、あるいは家電製品に搭載されたそれらが、オリジナルと同じ性能を発揮するようになるにはまだ遠い。けれど、ISの登場がもたらしたのは決して女尊男卑の風潮だけではなかった。

「ジルって音楽好きだよな。何聞いてんの？」
「あー・・・ミナミ・クリバヤシだったっけか。なんか日本の有名なアーティストらしい」

「・・・あれ？僕一応日本の流行とか雑誌で調べてみたけどそんなアーティスト知らないよ？」

「俺に言われてもなあ。てっとり早く日本の事が知りたいって言うたら教官・・・っと、もう簡易訓練終わったから教官じゃないんだっけ。大尉がデータくれたんだよ。このアーティスト知ってれば向こうでも話が通じる筈だから手始めにつて」

ヒント：二人の後見人と簡易訓練時の教官を兼任したのは、ドイツ空軍でも最精鋭と謳われる特殊部隊で副長を務める某女性士官である。特徴は部隊全員でお揃いの眼帯と、こっそり携帯端末にデータをを入れて持ち歩いているジャパニーズ少女漫画。

「けど、楽しみだなあ。日本には行ってみたいと思ってたんだ」

「あれ？ジル、今まで日本は行ったことなかったの？」

「ああ」

その言葉に、ハインツは多少の驚きをあらわにした。

簡易訓練で顔を合わせるうちに感じた事なのだが、ジルベルトの食生活はやけに日本的だ。食事は一日に三回、朝昼晩としっかり食べる。それでいて一食辺りの量が自分よりも少なく、同年代のハインツと比べても痩せている。しかし彼の外見にひ弱なイメージは無く、むしろハインツが見てきた同年代の友達よりもほど健康的な雰囲気を持っていた。

ハインツ自身はそれを見ても物珍しいの一言で済ませていたのだが、息子の話を聞いたテア・グリュネヴァルトは、ジルベルトの事をまるで日本人のような子だ、と言ったのである。実際ハインツはジルベルト本人から、小さい頃なかなか母国語を覚えることが出来ず難読症の診断を受けていたと聞いていたのだ。

その上ジルベルトはハインツに比べて、日本語の習得も早かった。日本語を受け持っていた教官がやたらとジルベルトばかりを褒める

ものだから、ハインツはとても面白くなかった。

「うちの母さんにジルの話したら、ひょっとして小さい頃にあっちに住んでいたんじゃないかって言ってたんだ」

「まさか。俺んち先祖代々ドイツで労働者だぜ？旅行する余裕もないし、俺はちよつと日本かぶれなだけだよ」

そのまま二人はあれやこれやと話をしながら当初の予定から七分遅れで搭乗ゲートを潜り、三十分後には機上の人となった。

ただそれぞれその胸の内には少しばかりの嘘と、少しばかりの好奇心があつたが。

（前世を跨いで十五年ぶりか。ハインツにはああ言っただけど、いろいろ違うんだろうな、俺が居た時とは）

（日本には前世でも行ったことは無かったな。どんなとこなんだろう暑かったり寒かったり忙しい国らしいけど）

「くくく・・・ついに、ついにこの時が来たか!!」

六畳一間の部屋の中、のっけから気持ち悪いテンションで笑みを浮かべる少年。名を、神谷龍一郎かみやりゅういちろうという。彼もまた、日本で発見された男性IS操縦者の一人であった。

中学校ではサッカー部に所属し、全国大会にも出場して良い成績を残している。交友関係も広く、高い身体能力を鼻にかける事の無い彼は、クラスの人気者でもあった。

・・・しかしながら、彼の欠点が多い。まだ中学生ゆえ、愛嬌の範囲で済んでいるが、勉強の成績はあまりよくない。サッカー部でもスタンドプレーに走ることが多く、監督からはいつも注意を受けている。

何より彼にはその内心で、自分以外の全てをまるで道具のように扱う部分があった。それは、彼の抱える『秘密』に由来する。

龍一郎には、前世の記憶があった。生まれつき体の弱かった“神谷 龍一郎”という一人の少年が、自分自身の弱さから目を逸らし、物語の中へ逃げ込み・・・その物語の主人公たちに自分を投射しながら、いつしか自分も人々から羨望のまなざしを向けられることを夢見て——最後には、交通事故であっけなくその短い生涯を終えてしまうまでの、十五年間の記憶が。

「まさかと思ったが、転生トラックだったとはな・・・テンプレとはちよっと違ったが、チート主人公となった俺に出来ないことはない!!」

彼の目的は、強い体を手に入れること“だった”。あらゆる苦境を、己の拳一つで切り開けるような身体能力。徹底的に鍛えれば、アスリートになることだって夢ではない、強靱な肉体。それを手に入れさえすれば、あとは望むものなど何もなかった。
・・・だから、だろうか。

体を動かせば、その年齢に見合わぬ動きを大人たちは称賛した。問題を解かせれば、前世の知識で以て考える素振りすらなく正答を導き出す姿に、子供たちは羨望の目を向けた。

前世ではありえなかった、たくさんの人間からの温かい言葉。天才。神童。麒麟児。龍一郎を表す言葉は、その三つだった。

そんな言葉ばかりの中で育てば、彼が増長するのも無理はない。自分は選ばれたのだ、と。人々の注目を浴び、その称賛を一身に受ける為に、新たな生を授かったのだ、と。龍一郎が己の目的を忘れ、ただ自分を『物語の主人公』と位置付けたのは、かなり昔の事であった。

しかしながら、彼はある時を境に、その注目を浴びなくなる。ISが世に知れ渡り、モンド・グロツソが開催されてから、大抵の人々の中で龍一郎の扱いはISに乗れない男子だ。

いじめられていた子供を助けて、いじめっ子の女子を怒れば、女尊男卑のご時世に女の子をいじめたと言われ、周囲からは疎まれる。折しもそれは、生前の知識に頼ってばかりで碌に机に向かって勉強する事の無かった龍一郎が学校の勉強についていけなくなった時期と一致した。

それから龍一郎は道化を演じた。お馬鹿で、体を動かすのが大好きな男。それを演じる鬱屈とした思いを、小学校からやり始めたサッカーで発散しても、女性から送られるのは『男にしてはやるじゃ

ない』という感情のこもった視線。

何故なんだ、俺は主人公じゃないのか、と溜まりに溜まった不満をいっそ爆発させてしまおうかと思ったその矢先——世界で初めて、男がISを動かした。

それから次々と発見される男性IS操縦者。龍一郎はこの時になつて初めて、この『物語の世界』が、『女性社会に飛び込む羽目になつた男の子』の話なのだと知つた。

それからは龍一郎はISの勉強をした。どの道、『自分も乗れる』のは確信していたからだ。

そして、龍一郎の学校で行われた起動検査。彼は打鉄を動かし、器用にその場でISの手で髪をかきあげてみせる。周囲はその絶対の自信に、おお、と驚愕した。

しかし、彼の目的はそんなことではない。この物語の主人公は、あくまで自分一人。他は、邪魔だ。まして、『本来の主人公』など。

「原作主人公のお前をぶつ潰して、俺が原作ヒロインを頂くぜ！覚悟してろよ——」

言いながら、彼は雑誌のあるページを睨む。そこには、一人の男性IS操縦者の、戸惑いを隠しきれない表情。龍一郎の愉悅の笑み、その根源にあるのは……

「――飯岡佑介!!」

とんでもない勘違いであった。

ところ変わって、アメリカ。ハインツやジルベルトと同じく、飛行機を待ちわびる少年の姿があった。その傍らには、一人の少女の姿。

「・・・で、今アメリカは第三世代型の軍用ISを開発中なの。これの開発に成功すれば、IS登場によって一気に傾いた経済バランスを・・・」

「ふんふん・・・あれ、そういやティナはその軍用ISについて何か知らないの？」

赤毛の少年が発した問いに、ティナ、と呼ばれた少女は大きな溜息を漏らす。

「開発そのものは発表されてるけど、ことは重要機密よ・・・実際に開発に携わるような人しか知らないのよ。どうせあたしは専用機持っていない代表候補生だし」

どうせ格闘訓練でも先輩に負けまくってて候補生の中じゃドンケツだーい、と落ち込むティナ。つい先日、日本でも代表候補生から外された者が一人居るらしい。

少年は慌てて話題の転換を図るべく、ややオーバーな手振りを交えてティナに話しかける。

「だ、大丈夫だって！ほらティナ、俺よりも喧嘩強いし！射撃もゲーセンとかで結構いけるんだからそのうち強くな——あべふっ！？」

「な・ぐ・さ・め・た・い・の・かトドメえ刺してんのかハッキリしなさいよーらああああああっ！？そもそもそのゲーセンのガンシューであたしに勝ち通してるあんたが言っても嫌味以外の何物でもないわああああっ！！」

少年の頬を引っ張り、上下左右に動かすティナ。彼女が落ち着くまで頬の筋肉を蹂躪された少年は、おおおおお、と呻きながら慌ててあるものを差し出した。

「うめ、マジごめん・・・コレあげるからもう勘弁して・・・」

言ってティナの目の前に差し出されたのは、先ほどまで少年が摘まんでいたスティック状のポトスナックだった。アイルランド産ジャガイモ100パーセント使用の無駄にグレードの高い海外版『じゃ。りこ』である。

「まったくもう、女の子をお菓子で釣るとかわかってないわねー」
「とか言いつつ食べてるじゃん・・・はい、なんでもないです。すみません」

ついつい漏れた一言に、ティナが目線で以て少年の言葉を封じる。ちなみにティナも先ほどまで同じものを食べていたのだが、彼女の分は既にその腹の中へと納まっている。先ほど自分の発言を嫌味だなんだと騒いだティナだが、太る太ると言いながらジャンクフードに目が無く、それでいてスタイルを維持し続けているのだから同年代の女子からかなり目の敵にされていることに本人は気付いていない。

（いや、まあ、そういう気ままなところがティナの魅力なんだけど・・・って、何考えてんだ俺は）

不意に脳裏に浮かんだ言葉を、少年は慌てて払った。

いつからだっただろうか。少年・・・フレデリック・バーンズが、この気ままな少女を目で追うようになったのは。

最初に会ったのは、幼稚園ナサリーだったと思う。同年代の子どもに比べても人一倍わがままだった少女の事を、自分は快く思っていなかった。けど、周囲にさけられていたのは自分も同じだ。

持って生まれた赤毛。イスカリオテのユダや、アベルを殺したカインと同じそれは、未だに十字教が隆盛を誇るアメリカにおいては『裏切り者』を表すものだった。

人間など、自分と少しでも違う部分があればそれを上げ連ねて罵りたてる生き物だ。フレデリックは、『赤毛の男子』として、小さい頃から碌な目に合わなかった。

小学校ではホームスクールを選び、自宅に引きこもった。

けれど、そんな時。

『ねえねえ、ナーサリーで一緒だったよね』

『・・・なんだよ』

『皆と遊びに行くの。あなたも行かない？』

『・・・やだよ。俺の髪、真っ赤っ赤だろ。みんなこれ見たらうるさいんだ』

『ふうん、勿体ないわね。きれいな赤毛なのに』

そう言っ外に連れ出した少女の眩しい笑顔を、フレデリックは生涯忘れないだろう。赤毛のフレデリックが遊び仲間に入るのを渋った子供たちを、お得意の『わがまま』で黙らせてしまった彼女の、得意げな顔も。

「フレッド？・・・フレッド、聞してる？」

「・・・ああ、ごめん。ちょっと考え事してた」

回想から意識を戻すと、少しばかり頬を膨らませたティナが、フレデリックを半眼で見ていた。

「しっかりしなさいよね、フレッド。あんたはアメリカで一人しかない『ISを動かせる男』なんだから」

「ごめんごめん、ついでにこっちのチョコもあげるから許してってば」

「・・・もー仕方無いわねえ」

幸せそうに板チョコをかじるティナを微笑ましい目で見つめながら、フレデリックは胸中で呟く。

（そうだ、やっとティナと同じ位置に立てるんだ。頑張らないと・・・！）

意気込んで、飛行機が付くまでの短い時間、フレデリックはティナからISのレクチャーを受け続けた。

その日、飯岡佑介は久しぶりに生まれ育った我が家に足を踏み入れていた。他の六人と違い、史上初の男性IS操縦者として名前も顔写真もマスコミによって公開されてしまった佑介は、危険を避けるために東京に引っ越し、政府の保護を受けていた。もともと佑介

が住んでいたこの家も今は、表面上は税金未払いによる差し押さえの名目で行政が所有している。飯岡家の人々を知らない者には、ここに佑介が住んでいたことさえ解らないであろう。

「っ、ううーん・・・久しぶりの我が家だなあ・・・」

リビングの中央に立ち、ぐっ、と背を伸ばす佑介。家具のほとんどが無くなっているが、十五年間過ごしてきた家はやはり落ち着くらしい。一時帰宅の許可を貰ってから一週間。明後日になったらIS学園に向かわなければいけないのでここに居れる時間は少ないが、それでも訓練合宿の前に来ることが出来て良かった、と思う。

「おーい、佑介」

「うん？・・・おう来たか、相棒」

開け放っていたリビングの窓から、隣の自宅で茶を淹れてきた孝明が姿を見せた。淹れてから水筒に詰めた緑茶と、孝明の母が焼いたクッキーで、二人は窓の近くに腰かけ、久々の会話を楽しむ。

「ふむ、暫く見ないうちに眼鏡をかけるようになったのか」

「ん？ああ、これね。前からちよつと黒板が見えにくいなーって思っ
てはいたんだけど、こないだの身体検査で視力がガタ落ちしてて」

言っ
て、鼻を掻く佑介。その鼻には、黒縁の飾りっ気のない眼鏡が乗っかっていた。

「しっかし意外と気になるもんだなコレ。すぐ汚れるし慣れないと耳が重いし」

「そんなものだよ。俺も『前』は・・・っと」

前世では中学一年生から、半世紀を超える眼鏡との付き合いが始まった孝明。八十で失明するまでのことを冗談がてら語ろうとしたのだが、はっと気づいて口を噤む。今の彼らは、いつ何処から、誰に見られているのか分かったものではない。『かつこつきたいおとしごろ』なのだと勘違いしてくれば良いが、不用意に前世の事を話題に出すのは憚られた。

佑介もそれを察したのか、すぐに別の話を始める。

「そういえばさ、委員長いたじゃん。うちのクラスの。あの娘、確かIS学園志望じゃなかったっけか？」

「らしいな。俺がISを動かしたら何かとこつちを睨んでくるようになったが」

「あれ？もしかして俺が居ない間にラヴの雰囲気？」

「・・・自分が猛勉強して目指してるとんでもない倍率の学校に、もう入学が決定した同級生がクラスに居たらどう思う？」

「・・・ごめん、俺が悪かった」

孝明といえば、同じクラスの委員長こと日住（ひずみ）一雛乃から送られる敵意ある視線に耐える日々を送っていた。

孝明が言った通り、日住は未だIS学園入学を夢見て勉強中の受験生である。しかも、そんじょそこの私立高校なんかよりも倍率はべらぼうに高い。一足早く入学が決まってしまった孝明に彼女が向ける視線が厳しくなってしまうのは、いたしかた無いことであった。

「・・・ただ、なあ。ほれ、IS学園志望の女子は、委員長だけじゃなかるう？教室中の女子からの視線が痛くてのう・・・お前さんじゃないが、俺も女性恐怖症になりそうだよ」

「あー・・・ほ、ほら、明後日から一か月はそれも見ないで済むんだし。それが終わったら四月までの我慢だって。頑張ろっぜ」

ついでに言ってしまうと、男子禁制の花園であるIS学園への入学や、そもそも単純に受験の必要がなくなったことへのやつかみで、最近の孝明は男子の味方も少なくなってきた。

四月が待ち遠しいと呻く孝明になんと行って良いものやら分からず、苦笑いを浮かべる佑介であった。

それぞれの葛藤や、思惑を胸に。少年たちは、集う。彼らの出会いが、何をもたらすのか。神ならぬ彼らには、まだ何もわからない。

第六話：合宿前日　ボーイズ・ミーツ・アット・スクール（後書き）

学校の友達に栗林みな実の話をしたら「へえ、初めて聞いた」と言われて戦慄したよしおかです。

今回の話は難産でした。七人もいると正直書き分けらんねえ。

転生者たちは、これで出揃いました。と言ってもまだ性格が全然描写できてませんから、訓練編でちまちまと書いていきます。

・・・それが終わって原作に入る辺りには、皆さんがうちのオリキヤラ達に少しでも愛着を持ってくれるといいなあ、と思ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9368y/>

IS インフィニット・ストラトス/セカンド・ライフ

2012年1月4日03時51分発行